

---

# お嫁サンタ

celestial

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嫁サンタ

### 【Nコード】

N9277I

### 【作者名】

celestial

### 【あらすじ】

クリスマスの朝。少年が目を覚ますと、部屋には一体の西洋甲冑が居座っていた。これはサンタからのプレゼントだとも言われるーか？ 今、少年の受難な日々が幕を開ける。 現在、更新は一時停止につき復活までしばしお待ちを……。

## Opening

その闇はただひたすらに暗かった。  
黒くどこまでも漆黒。

その闇からは如何なる温度も感じることはできない。

無機質な闇は全てを呑み込む。

周りの空間を、人を、植物を……  
あらゆるものを溶かし同化する。

それに伴い徐々に闇は力を増してゆく。

そして闇が暗く辺り一面を包み込んだころ、中央にぼうつと弱々しく光るピンポン球大の光球が一つ現れた。

その儚く揺らめく光球は徐々に輝きを増してゆき、人型を象っていく。

光の出現から暫く、闇の中には一人の男が佇んでいた。

「くつくつく…」

闇と同色の黒いダークスーツに身を包んだ金髪碧眼の男は喉の奥で実に愉快そうに笑う。

「くくつ、ははは…」

ひとしきり体を揺すり笑っていた男は、不意に笑うのを止めニヤリと不敵に口の端を吊り上げたまま、何も無い無機質な虚空を仰い

だ。

「ハッピー・ハッピー、メリークリスマス」

そう呟くと男は周りの闇に吞み込まれ、音もなく溶け込んでゆく。

後に残ったのは深く重厚な闇と、楽しそうな男の声だけであった。

尚、これはクリスマスイブのことだったという。

## 出逢い / 01

池付きの広い庭に綺麗に整えられた庭園、几帳面に配置された置き石の数々。

その日本の美を如何なく感じさせる広大な敷地を持つ、純和風の平屋の一角に少年はいた。

少年の部屋は落ち着いた自宅の庭と同様に綺麗に片付いていた。いや、正確に言うのなら物があまり置かれていない殺風景な部屋であった。そのシンプルな構造の部屋は如実に少年の性格を表している。

そして、その殺風景かつシンプルな少年の部屋はというと、畳の上に敷かれた布団一式と小さな卓袱台だけだった。

それ以外には何もない生活臭の少ない少し淋しさを感じさせるただっ広い部屋。

その部屋の中央辺りに敷かれた布団の中で少年はすやすやと眠っていた。

「ふみゆう……」

少年の名前は黒崎空雅。くろさきくうが

「空のように雅な男たれ」と両親が与えた珍妙な名を持つ少年であった。

少年改め、空雅はゴロリと寝返りを打つ。その拍子に鼻まで覆っていた掛け布団がはらりとはぐれる。

「ん……、うん……」

因みに今は絶賛“冬”である。当然ながら布団がはぐれると寒い。暖房器具一つない殺風景な部屋ともなれば尚更。

——畢竟、ひんやり寒さを感じた空雅は目を醒ますのであった。

「ふあ〜」

大きな欠伸を一つ。

それと共に吐き出される白い吐息が冬の寒さを訴えかける。

グシグシと眠そうに眼をこする空雅のピジャマには可愛らしい水玉模様があしらわれていた。空雅がちょこんと頭の上にのせているナイトキャップと同じ柄である。

しかし何故また男である筈の彼が、こんなにも可愛らしい寝巻きを身に纏っているかというと、理由は単純かつ明快。至極簡単な理由である。

彼は“大”の可愛い物好きなのだ。可愛い物には目がない。そういった理由で空雅は恥ずかしげもなく男が着るのには少々躊躇われるようなファンシーな柄のピジャマを身に纏っているのだった。

しかし、そんな可愛いピジャマも彼は違和感なく自然に着こなしていた。

漆黒の艶やかな黒髪に、黒曜石のように輝く黒く丸い瞳。

彼のその優しそうな顔立ちに実に可愛らしいピジャマは合っていた。

「くあゝ……、眠っ」

本日二度目の欠伸を漏らし、まだ温もりが残る布団に再び倒れ込む。

目的は勿論、人類の最高の至福とされるザ・二度寝を敢行するのだ。

そうして二度寝をするべく布団に倒れ込む空雅であつたが、ふとその動きを止める。

布団にダイブをしようとした瞬間、視界の端に見慣れない物体を捉えたからに他ならない。

殺風景な広い部屋には敷き布団一式と卓袱台しかない筈である。そう、ない“筈”なのだ。

しかし、どういったワケかそれ以外の物がある。

「……何で鎧？」

空雅が呟いた通り部屋の片隅には金属特有の鈍い光を放つ西洋風の甲冑が一体。静かに、厳格に、そして不気味に、佇んでいる。

爽やかな朝には不釣り合いなことこの上ないのに加え、日本の伝統美溢れる和室に西洋甲冑は超絶似合わない。

空雅は暫し圧倒的存在感を持って部屋に君臨する西洋甲冑を寝ぼけた頭で凝視する。

それから、ヨロリと立ち上がりフラフラと覚束ない足取りで甲冑に近寄る。そして再び甲冑をじいつと見つめた後、ふと興味を無くしたようにふいと顔を背ける。

そしてガシガシと頭をかきむしりながら部屋を出て行くのであつ

た。

+

さて、現在広大な敷地を誇る純和風の平屋の一室では、座布団の上座った一人の少年が卓袱台の前で腕を組み、「うんうん」と唸っていた。

少年の名は勿論、空雅。

彼が唸っている理由は考えるまでもない。部屋に不法投棄されている不可解極まりない西洋甲冑である。

時刻は昼前。

遅くまで惰眠を貪っていた寝坊助さんの空雅でも流石に起床する時刻だ。

顔も洗い、着替えも済ませた空雅は寝ぼけた頭も覚醒させ普段の冷静な思考を取り戻す。

普段着は可愛い柄のものではなく、パリッとしたスーツ姿。淡いピンク色のカッターシャツにグレーのスーツ。純白のネクタイはアクセントとなって全体を引き締めて見せる。

何故彼が休日にも関わらずスーツ姿なのかと問われると、偏に「面倒くさい」の一言に尽きる。

逐一服をコーディネートするのが面倒なのだ。

その点スーツなら服を選ぶ必要がなく、そつなく無難に仕上がる。

そんな理由で彼はスーツを身に纏っているのだった。

まあ、今はそんなことはどうでもいい。

目下の問題は目の前にある謎の塊と化している西洋甲冑である。

太陽の光を浴び鈍い光沢を浮かべるそれは部屋一杯に不穏な空気を醸し出していた。

西洋甲冑の高さは割と小さめ。とは言っても、空雅の胸元くらいの高さは充分にある。

それは如何にも中世ヨーロッパに作られたような甲冑で、映画などで騎士<sup>ナイト</sup>なる者がこれと類似したモノを身に纏っていたのを度々見かけたことがある。

そして、かなり重いと思われる。思われる、と言うのは実際に持つて質量を確認したわけではないからだ。しかし、重厚かつ鈍重な輝きを持つそれは素人目にも一目で金属だということが解る。

よって空雅はこれを重いと結論づけたのだった。

「しかし、誰がこんなモノを持って来たんだろう？ ……相当重いと思うんだけど」

空雅は可愛らしく小首を傾げる。

思案顔になり思考を巡らす、どうにも理解できなかった。

誰が？ 何の目的で？

こればかりは、いくら頭を捻ったところで蛇口よろしく良い考えが出てくるものではなかった。

「あ、もしかして、クリスマスプレゼントかな……？」

空雅がポツリと呟く。

クリスマスチャンでもない空雅は今朝に至るまで、クリスマスのことをすっかり失念していたが、先程居間で見たニュース番組で言っていた。

そう、今日は天下御免の十字架親父誕生祭——、通称“クリスマス”である。

「……でも、こんなモノをプレゼントされても困るな。全くサンタさんの人格が疑われるね」

空雅はこの不可思議な西洋甲冑 を置いていった人間を、サンタだと結論づける。一応、根拠はある。消去法で考えた結果であった。

まず、両親がプレゼントしたというのは有り得ない。確かに空雅の両親なら、この趣味の悪いとしか言いようのない西洋甲冑も真顔でプレゼントするくらいのハイセンスの持ち主（当然、皮肉である）だが、それはないのだ。

両親は二年前に交通事故で死んだ。つまり、両親がこれを置いて行ったという線は完全に消えるわけである。

ならば、外部の者がコレを？

そうは考えてみたものの、それは物理的に不可能だと即座に気がつく。

いくら自分は寝付きがいい方だとは言っても、自分に気づかれることなくこの部屋に入ることは不可能。

更に悪いことには、この家の周りには、グルリと背の高い塀で覆

われている。つまりは、あの重たそうな甲冑を背負った状態で、高く威圧感のある塀を乗り越えなければならぬのだ。そして、そんなことが“常人”にできる筈がない。

……という消去法の結果、この用途不明な西洋甲冑を置いて行った犯人は“超人”であるサンタに他ならない、という結論に相成ったわけである。少々常識的には無理がある結論だが、気にしてはならない。

ぐううう

そんな事を考えていた折り、閑散とした静かな和室に何とも情けない音が響いた。

音源は空雅の腹であった。

時計を見ると昼を少し回った頃。

普段ならまだそこまで腹が減るような時間帯ではないが、如何せん今朝は起きる時間が遅かった。

故に朝食も食べていない空雅には、かなり堪えた。

「うん、お腹も減ったしご飯にするかな」

誰に言うでもなくそう呟くと空雅は立ち上がり、再び部屋を出て行くのであった。

「何にもない……」

パタンと冷蔵庫の扉を閉める。

現在、空雅は昼食を取るべく、自室からは少し離れた厨房に立っていた。

キッチンや台所と呼ぶには広すぎるそこはまさに厨房。

やはり綺麗に片付いている厨房にはオーブンやフライヤーは勿論のこと、グリラーにグリドルまでが備え付けられている。

それに加えて沢山のシンク、料理好きには堪らない夢のような空間である。

しかし生憎、空雅は別段料理好きというわけではなかった。幼いころ母親に料理を仕込まれた空雅は実は人並み以上に料理が得意だったりするのだが、ここ最近は厨房に来ることもめっきりと減った。

昔は料理を作って、それを食べてくれた人の笑顔を見るのが好きだった。だが、今は食べてくれる相手がいない。両親は既に死んで広い屋敷に一人きりだ。

自分が料理を作るのは己の餓えを凌ぐときのみ。  
それ以外は厨房に立つこともない。

更にそれに加えて、家政婦さんも一人雇っている。

いつもはその家政婦さんが調理をこなしてくれるので、わざわざ自分で作る必要もない。

しかし、現在その家政婦さんと言うとこの屋敷にはいないようだ。

今日はクリスマスということもあり、丸一日暇を与えている。

つまり、今日1日は自ら調理するしかないのだ。

そしていざ調理を開始しようと、冷蔵庫を開けてみたのだが……

「何にもない……」

冷蔵庫の中はものの見事に空であった。

このときばかりは、食材を余すことなく使い切る有能な家政婦を恨んだという。

「仕方ない、どうせ夕飯の材料も買わなきゃだし、ついでに外で昼食を取るか」

そう言つて空雅は短い嘆息を一つ。

極度の面倒くさがりの空雅にとって、外にでるのはあまり好ましくない。ましてや冬の寒空の下である、暗鬱ひんうつな気分も一人と言ったところだろう。

「よし、そうと決まったらとつと行つて来るか」

早いところ昼食と買い物を済ませて帰宅したい空雅は、クルリと踵を返して厨房を出ようとする。

そして、厨房を出ようとした空雅は、振り返った体制のまま固まった。

「……………」

「……………」

空雅と西洋甲冑の無言での物言わぬ応酬。

——そう、振り返った先には“空雅の部屋にいる”筈の西洋甲冑があるのだった。

## 出逢い / 02

外の空気は澄み渡っていた。冬特有の新鮮な空気はピリリと肌を刺激する。

そして、空は快晴と呼ぶに相応しい雲一つない青空。昼間ということもあつてか、そこまで寒くもない。

まさに、出かけるには打ってつけの日よりだった。

神楽市を中央に縦断するように流れる成瀬川なるせがわの東手は住宅街となつている。

その住宅街から北部に少し外れた所には商店街が一つ。

その商店街は人で賑わっていた。

それもその筈、今日は天下御免のクリスマスなのである。

当然、道を闊歩する人々の表情は一樣に明るく皆笑顔であった。

恋人達は笑い合いながら、子供達は街を飾る煌びやかな装飾品に目を輝かせながら……、老若男女問わずそれぞれにクリスマスを楽しんでいた。

しかし、そんな楽しいクリスマスとは裏腹に雑踏の中を浮かない顔をした少年が一人。

この苦渋の表情を浮かべる少年の名は黒崎 空雅。

艶やかな漆黒の黒髪と、黒曜石のように輝く瞳を持つ少年である。

そして少年は人々の視線を一人、独占しながら歩いていた。いや、

正確には一人ではない。一人と“一体”である。

その一人と一体——空雅と謎の西洋甲冑——は、確実に道行く人々の好奇の視線を独占していたのだった。

「はあー、何だろうねコレは」

ガシャガシャと音を鳴らしながら後をついて来る鎧を空雅は横目で一瞥しながら呟く。

この鎧は今朝から空雅の部屋に置かれていたものだった。

それは当初動かないものだと思われていたのだが、それが動くが発覚したのは昼過ぎ、空雅が厨房を出ようとしたその時であった。

部屋にある筈のそれが独りでに厨房まで来ていたのを見て、初めてコレが動くと感じいたのだ。

「やっぱり誰か中に入ってんだろうな」

動くということは中に誰かが入っていると考えるのが普通だろう。中に誰も入っていないとなると、相当に不気味である。

いや、中に見知らぬ人が入っているというのも確かに不気味ではあるのだが、どうやらこの西洋甲冑は危害を加えるつもりはないらしく取り敢えずはほっておいても問題はないようだ。

尚もガシャガシャと音を立ててついてくる西洋甲冑は終始無言。

どうやらこの甲冑は空雅の後をついて来るようであった。

「せめて何か喋ってくれないかな……」

「——（ふるふる）」

空雅の呟きに首を横に振る西洋甲冑。

先ほどからこの押し問答の繰り返しである。

つまり、空雅が問えば西洋甲冑が首を振り答える。

ただ、ひたすらにこの繰り返しであった。

さて、空雅が家を出てから暫く。

当初の予定では適当なファミレスにでも寄って簡単に昼食を済ませようと思っていた空雅であったが、如何せん人の目が痛かった。

常識的な思考を持つ彼には、道行く人の何か奇異なものでも見るような視線に耐えられる筈もなく、結局のところそれは断念されることになり、最寄りのスーパーだけに寄って帰ることにしたのだった。

両手に大きく膨れ上がった買い物袋を持った空雅は短い嘆息をつく。

結局というべきか、やはりというべきか、謎の塊である西洋甲冑は空雅の後についてスーパーにまで来た。

ある程度予測していた事態とは言え、あの時の主婦の皆様方の視線は痛かった。

あの時のなにかイタイものでも見るような主婦たちの視線を思い出して、空雅はぶるりと震える。

明日からは変わり映えのない日常に暇を持て余した主婦たちの格好のネタとして、この非日常的な光景……少年と西洋甲冑の不可解極まりない謎の組み合わせは周辺に知れ渡ることとなるだろう。

そんなことを考えながら歩いている時であった。

「ハッピー・メリークリスマス」

若干量の暗影が差したる空雅の表情とは裏腹に、やけに明るく呑気な声が耳に入った。

思わず声のした方へと顔を向ける。

果たして、空雅が顔を向けた先には一人の男がニコニコと顔中に微笑を浮かべ立っていた。

美形と称しても何ら差し支えのない男の年頃は、外見から判断するにおよそ三十代前半程度。

高い長身を漆黒の闇のようなダークスーツに身を包み、やはり黒く鍰の広い帽子を頭にちょこんと乗せたその姿は、映画などで目にすることがある『ごつど』で『ふぁーざあ』なマフィアのそれと類似していた。

何より目を惹くのは、その男の奇特な出で立ちよりも、太陽の日差しを浴びて煌めく綺麗な金色の髪と、清水のように澄んだ蒼い瞳。その金髪碧眼の顔立ちには欧州系、もしくは西洋のもの。

ともかく、この男の見てくれは空雅と謎の西洋甲冑とは別の意味で目立っていた。

そう言ったわけで、思わず全身黒ずくめの男をしげしげと見てしまった空雅を誰が責められよう。

「……………」

「……………」

西洋甲冑を引き連れて歩く怪しい少年と、一見するとマフィアに間違えかねられない不審な男……、両者の目がバッチり合って暫し無言で対峙する。

「……………あの、僕に何か用でも？」

気まずい沈黙に耐えかねた空雅が先に口を開く。

冬の風は冷たく痛い。

「君は黒崎空雅くんかな？」

少し間を開けると男は偽悪的に微笑んだ。

当然、空雅はこの問い掛けに対し、驚きに目を見開く。

何故ならば自分はこのどこか胡散臭い出で立ちをした男のことなど、これっぽちも、ミジンコの染色体の1万分の1ほども知らないのだ。

なのに自分のことは知られている。これは普遍的な高校生である空雅には十分に驚愕に値するものであった。

「……………あなたは何なんですか？ どうして僕を？」

畢竟、空雅の口が紡ぎ出すのは疑問系の言葉。

そして、この問いに男はニヤリと半月型に口の端を吊り上げて、ツカツカと空雅のもとに歩み寄る。

空雅の眼前まで歩を進めた金髪碧眼の黒ずくめは、どこか楽しそ

うな声で歌うようにのたまった。

「私かい？ ははは、私は唯のしがないサンタクロースさ」

「……………」

——絶句。

無邪気に笑いながら答える男を見て、これ以上関わっちゃいけない、と警報が空雅の頭の中でけたましく鳴り響く。

「それでは、さようなら」

空雅は頭の中でウルサク鳴り続ける警報に従い、クルリと踵を返すとスタスタと足早に歩き始める。

当たり前だ、サンタを自称するような人間がまともである筈がない。

だいたいにして、サンタは赤服の白髭爺さんだと相場が決まっている。しかし、目の前に立つ男は全身くまなく黒ずくめである。怪しいにも程があるというものだ。

……と、ガチャガチャと音を立てながらついてくる西洋甲冑を引き連れた「怪しい」少年が考える。

「おーい、待ちたまえ空雅くん！ 私の話がまだ終わってないんだが」

背後から声が掛かる。

しかし、待てと言われて待つ程空雅はお人好しではない。当然の結果として後ろの声は無視して歩き続ける。

「おゝい！ 待ってくれって、雅俊の倅よ」  
せがれ

この声に反応して、ピタリと空雅は動きを止める。

まさとし  
雅俊。

それは二年前に亡くなった空雅の父親の名であった。

「どうして父の名を……？」

もはや、この西洋甲冑がなんぞやということは空雅の頭がない。  
最大の疑問はこの目の前に立つ金髪碧眼の男。

少なからず父親のことを知っているような口振りであった。

「うん、まあつもる話もあるから、空雅くんの都合さえよければ喫茶店でもどうか？ 奢らせて貰うよ？」

男はニコニコと笑いながら嬉しそうに喋る。

空雅としては見も知らない不信な男にひよいひよいとついて行くのは不本意であったが、父のことを知っているようだ。

行くか、行かまいか……。

しばらくの間空雅は考える。

そんな空雅を横目で伺いつつ、男は空雅の後ろに控える西洋甲冑を一瞥する。

「もしも空雅くんが来てくれるなら、君の後ろにいる子の説明もするけど？ ……というよりも、そっちが本題だったりして。どう？」

そう言っつて男は世の女性を虜にするウィンクをパチリと一つ。

この瞬間、空雅はこの男について行くことに決めたのであった。

+

「いやあ、香ばしくて誠にいい香りだねえ」

実に画になる仕草でカップを手に取り、美麗にして優雅な手つきでコーヒーの香りを楽しむ金髪碧眼の男。

現在、空雅たちは男の提案通り喫茶店にやって来ていた。

喫茶店の名は『どリーむ おあしす』。

洒落た感じのいい名前にしようとしたけど結局失敗しちゃった♪  
感が否めない妙な名前の喫茶店である。

「……苦い」

空雅の目の前に座る男は何やら渋い表情でカチャリとカップを置くと、ドバドバと砂糖を入れ始めた。

「空雅くんも如何かな？」

男は向かい側に座る空雅に砂糖を少し持ち上げて訊ねる。

「いえ、結構です」

「そうかい？　なら、君は？」

次は空雅の隣にどつしりと金属特有の光沢を浮かべながら座る西洋甲冑に訊ねる。

要するにテーブルの上には三つのコーヒーが……謎の西洋甲冑の分も置かれていた。

「——（ふるふる）」

首を横に振り男の申し出を断る西洋甲冑。

その西洋甲冑を男は優しい表情で見ると、穏やかに言う。

「そうだったね。君はいつも無糖だったのをすっかり失念していたよ」

この時、空雅は微妙な違和感を感じた。

いつも……？

いつも、ということは常日頃からこの金髪碧眼の男はこの西洋甲冑と共に行動しているということである。

「あなたとこの鎧は知り合いか何かで？」

そう考えた空雅の問いがこうなるのは、もはや必然であった。

「ははは、知り合いも何も親子だよ、空雅くん！」

男が愉快そうに笑いながらそう告げる。

これには流石の空雅も驚愕。

今日は今朝から色々と驚くこともあったが——具体的には、朝起きると西洋甲冑があつたり、その甲冑について来られたり、不振な男に父親の名を出されたり——、本当に色々とあったが、今が一番驚いている。

思わず空雅は、隣で厳格に重厚に腰を下ろしている西洋甲冑と、目の前でニコニコと笑っている金髪碧眼の男を見比べてしまう。

「はっはっは、そんなに驚かなくても。似てるだろ？ 僕とその子？」

似てるも何も空雅はこの西洋甲冑の素顔を見たことがない。んなもん解るわけもなかった。

ただ本当にこの鎧の中の人が目の中の金髪碧眼に似ているのなら、相当に美形だということだけは解った。

「あつ、そうだ」

「？」

男が何かを思い出したようにボンと手を打つ。

「そう言えばまだ名乗っていなかったね。私の名はバン・ヴィルヘム。で、君の隣で座っているのが僕の娘、ベル・ヴィルヘムちゃんだ。改めてよろしくね、空雅くん」

バン・ヴィルヘムと名乗った男は柔和な笑みを浮かべながら手をすつと差し出す。

空雅は差し出された手を見てそれが握手を求めているものと理解すると、やんわりと手を握る。

「それで早速なんですが、一つ伺ってもよろしいですか？」

バンによりガツシリと拘束されていた手を解放させると空雅は先ほどから気になっていたことを切り出した。

「あの、この鎧……、ベルさんは女の子何ですか？」

先程気になったこと。

それはバンがこの西洋甲冑、もといベルのことを『娘』と言ったことであった。

娘というからには十中八九この厳つい鎧を身にまとっているのは女の子ということになるだろう。

「うん、安心してくれて構わないよ。ベルちゃんはとても可愛いからね」

そう言ってニコリと微笑むバン。

一体何に対して安心すればいいのか、全く検討もつかない。

「何って、ベルちゃんは空雅さんの許嫁だからね。可愛い方がいいだろう？」

「はい？」

許嫁……？

この謎過ぎる西洋甲冑が？

空雅の頭の周りで疑問符が飛び交い、旋回、アクロバティック飛行を行う。

そして直後に軽い頭痛。

——この時、静かに、しかし確実に……。

空雅の穏やかなる日常は崩れ始めたのであった。

## 出違い / 03

ガラス張りの窓越しに見える景色は、まさしく“冬”のそれ。  
地球温暖化の所為か今年の冬は暖かく、いわゆる暖冬と呼ばれる  
ものであった。

しかし、それは例年の冬の寒さと比べると、という安易な比較だ  
けの話に過ぎない。

どう比較したところで“冬は寒い”という不変にして不動の既定  
事項を覆せる筈もなく、やはりコタツと合体していたいなと思う  
今日この頃。

そんな寒々しい季節の中、ぬくぬくと暖房の効いた店内で暖かい  
コーヒーを啜る男が一人。

彼の名をバン・ヴィルヘルムという。

「少しは落ち着いたかな？ 空雅くん」

一通りコーヒーの香りを楽しんだバンは、カップをカチャリとコ  
ースターに戻すと、澄んだ蒼い瞳で目の前に座る少年に訊ねる。

「ええ、落ち着くには落ち着きましたが……。だからと言って、話  
の内容が理解できたわけではありません」

バンの向かい側に座る黒髪の少年、黒崎 空雅は神妙な面持ちで  
答える。

無論、空雅が言った「あの話」とは、空雅の隣の席にドシリと腰

をおろす謎の西洋甲冑の件であつた。

空雅にとって衝撃のカミングアウトがなされたのは、ほんの数分前のこと。目の前に悠然と座る男が紡いだ言葉には、相当な破壊力が込められていた。

『ベルちゃんは空雅くんの許嫁だからね』

頭の中でグルグルとこのワンフレーズが漂う。

これは良くも悪くも普遍的な高校生である空雅を困惑させるには充分過ぎる程の威力を持っていた。

一般論なら、実は許嫁がいた、というだけでも驚愕に値するといふものである。

ましてや、その相手が鈍重な光沢を放つ全身くまなく厚い鎧で被われた西洋甲冑なら、空雅が言葉をなくすのもはや当然の理ことわりのよう  
うに思えた。

「えと、ツツコミたいことは山の如くありますが、どこからツツコミ  
めばいいのやら……」

「はっはっは、そんな空雅くんのために『お義父さん』が分かり易く説明してあげよう!」

『お義父さん』のくだりは華麗なスルーを決めこむ。これ以上ツツコミどころを増やさないで欲しい、そう切実に思う。

軽くげんなりした様子の空雅は静かに溜め息を、実に愉快そうなバンにはにこやかな笑みを。向かい合う二人のテンションは見事に噛み合っていないかった。

「じゃあ、説明するから取り敢えず聞いてくれるかな?」

ニコニコと笑みを絶やさないバンに、静かに頷く空雅。

説明してくれるというなら聞かない筈もない。願ったりかなった  
りだ。

空雅が頷くのを見たバンは満足そうに話を始めた。

「私と雅俊くん……、つまり私と空雅くんのお父さんは高校のときの  
クラスメートだった。私はサンタということもあり、当初は低俗  
な人間ごときと……」

「あの、すみません」

話を始めたバンの声を遮るように空雅が控えめに挙手をする。話  
の腰を折るのはいけない、と解っていてもどうしても気になる箇所  
があったからである。

「サンタ、って何ですか……？」

この金髪碧眼の男、バンという人物は初めて会った際も同じよう  
なことを口走っていた。

そう記憶に遠くない出来事である。

「うーん……、そうだねえ。じゃあ先にサンタの話からしちゃおう  
か」

立てた人差し指を唇に当て、しばらく考えるような素振りを見せ  
たバンは、目の前に置かれている自分のコーヒーを一気に飲み干し  
た。

どうやら少し苦かったらしく若干顔をしかめながらバンが言う。

「見てごらん、空雅くん。私の目の前にあるコーヒーは空だね？」

ほんの四半秒前まで暖かい液体であふれていたカップを指で指し示しながら訊ねるバン。

なるほど、確かにカップの中身は空である。

空雅は肯定の意味を込めて首を小さく縦に振る。

「なら見てごらん……」

煌めく金髪の髪を揺らしながら、バンが『パチン』と指を鳴らす。

途端、見る見るうちに空になったカップには黒い液体——おそろくコーヒーであるうもので溢れかえる。先ほどまで空であったカップの中は並々と黒い液体で溢れていた。

その液体は自身の存在が確かなものだとは証明するかのようになり、もうもうと白い湯気を吐き出していた。

「これは凄いですね……」

感嘆の声を漏らす空雅。

その声にバンは腕を組み「うんうん」と仕切りに頷く。

「どうだい、凄いだろ？ …… って空雅くん、少し反応薄くないかい？」

そこでバンはハタと気がつく。空雅の反応が薄い。

バンはすっかり驚いて動転してしまう空雅の姿態を思い浮かべて、またそういったリアクションを期待していたのだが、どういったわけか空雅の反応は一樣に薄かった。

突然に目の前にコーヒーが現れたのにも関わらず、驚くことなく

淡々としている人間にバンは驚きを感じた。

「や、確かに驚いてますけど……。何というか、流石に驚き疲れました」

艶やかな黒髪と黒曜石のように輝く漆黒の瞳を持つ少年は、やや披露気味にそう返した。

いちいちこんなことに驚いていたのでは身が持たない、そう思う。

朝起きれば部屋に西洋甲冑。

そして、何故だか後をつけてくる。

不審に思いつつも、街を歩けば見知らぬマフィア風の男に声を掛けられ喫茶店に。

そして、まさかの許嫁発言。

これ以上どう驚けと？

もはや目前に宇宙人が現れても、未来人がやって来ても、赤い球になる超能力者が出現したとしても、やはり驚くことはないだろう。

「いやはや、今日１日で随分とたくましくなったもんだねえ……」

半ば達観とも諦観ともとれる悟りを開いた少年は優美な仕草で自分のカップをゆっくりと口に運び、溜め息を一つ。

「それで、バンさん」

「何だい、空雅くん？」

「結局アレは何だったんですか？ 手品には見えなかったんですけど……」

空雅にとって手品やマジックなどのタネを見破ることなど朝飯前、普通に生活をしている限りほとんど無用な才能である。そして、そのほとんど無用な才能が告げている。

先ほどバンがコーヒーを顕現させて見せたのは決して陳腐な手品の類ではないと。

「あれこそがまさにサンタの能力と言っても過言ではないね」

「——（こくこく）」

バンの言葉に首を縦に振るベル。

首を振る度にの西洋甲冑がガシヤガシヤと金属音を奏でる。

「サンタの能力はあらゆる物質を自在に構成すること。つまりは、この力を使って全国の子供たちにオモチャを作っているわけだね」

「恐ろしく便利な能力ですね……」

この人達によるとお金は必要ないってことになる。目の前にあるコーヒーだってわざわざ金を払って飲む必要もない、構成すれば済む話なのだ。

「はは、それじゃあなんの趣もないよ、空雅くん。やっぱりコーヒーはお金を払って飲むから美味しいんだよ」

などと言いながら、先ほど自分の手により顕現させたコーヒーを美味しそうに啜るバン。

何だか矛盾しているような気がしなくてもないが、今となつてはもはや些末な問題に過ぎない。

「ん、でサンタの説明はこの辺でおっけー？」

コーヒーを飲み干したバンは弛緩した表情で空雅に問う。  
取り敢えずサンタというものが、『何でもありな存在』と漠然と理解した。どうせこれ以上のことを聞いたところで理解出来そうにない、そう考えた空雅は無言で頷く。

「じゃあ話を続けるね……」

バンは一つ間を開けてから、ゆっくりと話し始めた。

「私と雅俊くんは高校のときのクラスメートだった。当初、サンタ族である私は何の力も持たない下等な人間達と関わる気はなかったし、馴れ合うつもりもなかった。そんな私に初めてできた友人こそが……空雅くん、君のお父さんだよ」

そう言つてニコリと柔らかい微笑みを向かい側の席に座る空雅へ投げかける。

なるほど……、ウチの父親なら友の中にサンタの一人や二人いたところで不思議ではない。

と、空雅は彼なりに既に亡くなった父親へと想いを馳せる。

記憶の中の父親はいつも人懐っこい優しい笑みを浮かべていた。  
あの人はそういう人だ。誰とでも打ち解けることができる、他人を想いやれて理解ができる、そういう人間だ。

ときたまエキセントリックな行動に及ぶこともあったけれど、とても賑やかでそこにいるだけで場が華やぐような、そんな人だった。

「それから、妙に馬が合つてね。私と彼の仲は瞬く間に深まった。そして歳月は流れ、私も雅俊くんも結婚した。以後はお互いの奥方も交えてね、よく飲んだものだよ」

目を閉じてかつての親友との語らいを思い出して、バンは薄く微笑む。

「そこで私たちは一つの約束をしたんだ。お互いに生まれて来た子が男の子と女の子だったら許婚にしようって。それで結婚したなら私たちは親戚になるね、って」

バンはゆっくりと目を開き、向かい側に座った親友の忘れ形見とその隣に座る愛しい娘を見る。

「そして、子供が１６歳になった年のクリスマス。お互いを会わせよう、って」

それはバンとバンの愛した者、雅俊と雅俊が愛した者の四人の願いだった。

それから、お互いの間に産まれた子たちが可愛い男の子と女の子であったときはともに喜び合った。毎年クリスマスが来る度に将来を語り合った。

そして、親友夫妻が亡くなってから二年。

ついに、待ち望んだ今日という日が来たのである。

「空雅くん、私たちは何より二人の幸せ——空雅くんとベルちゃんの幸せを願っている。だから無理に結婚しろとは言わないし、二人には本当に自分が好きな人と結婚して欲しい」

「……………」

空雅は黙って真摯に話すサンタの、何より一人の親としてのバンの話に耳を傾ける。それは隣に座るベルも同じだ。

このバンという人の誠実さが伝わったから、それに応えるように真剣に話を聞く。

「当然、付き合うも結婚するも君達次第。反りが合わなければ、別れるもよし。これは君達の人生だ、私たちがどうこう決められる問題じゃない」

そこで、バンは真剣な表情から一転。

「ま、勿論私たちは前者になることを望んでいるんだけどね」

破顔一笑して、そう言った。

ガラス張りの窓から見える外は朱に染まりつつある。昼過ぎに家を出立してから暫く、真冬は日が沈むのが早い。

「そこでなんだけど」

「はい……？」

何だろうと空雅は好感が持てる男に聞き返した。

最初は不審に思っていたが、先ほどの真剣に話す姿は図らずも空雅の好感度を上げる形となった。

「どうだろう？ 暫くの間ベルちゃんと同棲してみる気はないかな？ 先ずはお互いのことを知らないと話にならないだろう？」

「はあっ!？」

しかし、これは好感度云々とは全く別の問題である。

いきなり同棲しろと言われても、かなり困る。これは普遍的な高校生としての当たり前な反応であった。

「……いや、でも若い男女が一つ屋根の下つてのは……」

勿論、空雅はベルが若いかな否かということなど知らない。鉄仮面を外したベルの素顔を見たわけでもないし、声を聞いたわけでもない。

ただ、先刻のバンの言葉から鑑みるにおそらく同年代と見て間違いないだろう。

「はっはっは、何だい？ 空雅くんは何か間違いが起これども？」

サンタと言うよりは悪魔と言った感じにバンはニヤリと口の端を吊り上げる。

「や、そういうわけじゃないですけど……」

「——（ぽっ）」

空雅の顔が熱く火でる。隣にすわるベルも両手を頬にやり、恥ずかしそうに身をくねらせる。

そんな初々しい反応を微笑ましく見ながらバンは、

「もし間違いが起こったとしても、空雅くんがベルちゃんを貰ってくれるなら問題ないしね♪」

と、今日一番の笑みで返すのであった。

このとき、空雅にはバンがファウストとの契約を済ました直後の大悪魔メフィストフェレスに見えたという……。

出逢い／03（後書き）

いきなり同居って……。

おいしいシチュエーションです。

## 出逢い / 04

冬は早朝がいい。

その昔、どつかの平安貴族の付き人がこんなことを言っていたような気がする。

確かに冬の早朝は静寂に包まれた澄んだ空気が何とも言えない趣を感じさせ、この閑散とした早朝の雰囲気はなかなか心地よい。しかし、そう思う反面でこうも思う。何も冬は明け方だけではない、と。

空は既に朱く染まり、暮れゆく夕陽はただひたすらに綺麗で優美だ。

「冬の夕暮れも捨てたものじゃないよね、ベルさん」

「——（こくこく）」

沈みゆく夕陽に映し出だされた長い陰が二つ。

その陰のうち一つの主たる、柔和で優しそうな顔立ちの若い男が隣を歩く少女に声をかける。

この声をかけられた少女の名をベル・ヴィルヘムという。

西洋甲冑を身にまとう少し……いや、かなり風変わりな格好をした少女はやはり普通のそれとは大きく異なっていた。何もかもが普通ではないのだ。

「まさか、クリスマスに本物のサンタに会えるなんて思いもしなかったよ」

艶やかな漆黒の黒髪と黒曜石のように黒く輝く瞳を持った、優しいそんな顔立ちの男——黒崎空雅は苦笑まじりに呟いた。

そう、空雅の呟きの通りこの西洋甲冑娘の正体は人間ではない。人間を遥かに超越した存在、サンタクロースなのである。

未だにサンタが自分のすぐ隣を歩いている、という事実を俄かに信じることはできないが、これはまぎれもない事実。

空雅は先ほど喫茶店にて、この西洋甲冑の父たる 男に不思議な力を見せつけられた。

目の前で実際に見せられた超常現象を目撃したのだ、もはや空雅にとってサンタの存在は疑いようのないものであった。

そして、疑いようのないものついでにもう一つ。

「今日から僕はベルさんと暮らすんだよね……？」

「——（こくこく）」

空雅の呟きにガシャガシャと金属音を奏でながら頷くベル。

そう、空雅とベルが同棲することはもはや決定事項なのであった。

暖房の効いた店内は温かった。

目の前には金髪碧眼の男に、隣には西洋甲冑。

それは今から遡ること数十分前、喫茶店にいたところである。

「本当にベルちゃんと暮らす気はないかい？」

金髪碧眼の男、バン・ヴィルヘルムがにこやかに問いかける。

……が、空雅としてはなかなか困る質問であった。

いや、一般的な思考回路を持つ人間なら困って当然だろう。いきなり今日知り合ったばかりの人間と……ましてや、女の子と暮らせというのである。

もはや空雅が困るのは道理と言えた。

「僕は今日初めてベルさんに会ったばかりです、ベルさんのことを何も知りません。ですから……」

「はっはっは、大丈夫だよ、空雅くん。何も知らないなら、これから知っていけばいい。一緒に暮らしていれば嫌でも解ってくるさ」

バンに断りを入れようとした空雅は口を紡ぐ。

確かにバンの言うことにも一理ある。一緒に暮らさないことには解らないこともあるだろう。

少し語弊はあるかも知れないが、要は食わず嫌いと同じ理屈だ。食べてみないことには、それが本当に美味しいかどうかなんて解りやしない。

「空雅くんがどうしてもベルちゃんと暮らすのが嫌だって言うんなら、私としては無理強いはするつもりはないんだが……どうだろう？」

それは意図して言ったものではなく、おそらくは無意識のうちに  
出たセリフなのだろうが、空雅はこういった物言いに滅法弱かった。  
一方的な高圧的な物言いなら反論の一つや二つは容易であっただ  
ろうが、自分の立場や意見を尊重しつつ話をされたら、人の良い空  
雅にはそれを無下に断ることはできない。

「もし何か困ったことがあったら私が出来るだけ力になるからさ」

これがまさに止めの一撃。

「……解りました。取り敢えず一緒に暮らしてみます」

結果、空雅はベルとの同棲を引き受けたのだった。

そして、今に至るわけであるが……。

喫茶店でバンと別れて暫く。外は俄かに薄暗くなり始め、今日か  
らともに暮らすことになったベルと帰路についていた空雅のだが  
……。

——絶賛、不良に絡まれ中であつた。

現在地は狭く薄暗い路地裏。

周りにはだらしなく服を着崩した見るからにアレな感じの男が5、  
6人。

これを絡まれていると言わずなんと言おう。

ベルと共に男数人にぐるりと周りを囲まれている空雅はぼんやりと考える。

その空雅の両手には食材で膨れ上がったビニール袋。これは本来の外出の目的である食料の調達、をした際にできた袋であった。

今日はベルさんが来たことだし、久しぶりに美味しいご飯でも作ろうと思ってたんだけど……。

空雅は再び周りを見渡す。

やはり、すんなりと帰してくれそうにない。中には今時有り得ない感じの鉄パイプやら木刀を持った古風な感じの人たちもいるようだ。

「何でこんなことになってるんだろうね……？」

空雅は誰に言うでもなく何もない虚空に問いかける。

これはもはや、一種の現実逃避の類。空雅には全く絡まれるようなゆわれはないのだ。

もっとも、絡まれている理由は解ってはいるのだが……。

「何なんだ、この鎧は？ おい、なんか喋れよ」

「この鎧、売ったらどんくらいすんだ？」

と、いうわけで。

明らかに絡まれるに至った原因は謎の鎧娘こと、ベルであった。正確にはその独創的かつ奇抜すぎるベルの身なりが原因。

そして、どのみち空雅は明らかに巻き込まれているだけであつた。

しかし、まあこの男達が絡んでくる要素としては充分すぎるものだろう。

普通の人間ならば怪しい西洋甲冑が街を歩いているても大抵は、……いや、寧ろ絶対にちよっかいは出さないと思う。そして、それは妥当な判断なのだ。

ただ、この世にはその妥当な判断すらも出来ない馬鹿、すなわち不良というものが存在するわけで。

「これ本物の鉄か？」

「ははっ、んなもんコイツで叩いてみりゃ一発で解るさ」

バンのような天然の金髪ではなく、下品に頭を金で染め上げた男の問いに対し、木刀を持った男が答える。

何やら話の内容的にかなりヤバイ。たらりと空雅の頬を一筋、冷や汗が流れ落ちる。

直後、空雅の悪い予感、見事に的中することになった。  
ベル目掛けて大上段に木刀を振り上げる男。

「逃げて、ベルさん!!」

空雅の叫びも虚しく木刀は力任せに振り下ろされる。

「……？」

しかし、その木刀がベルを打つことはなかった。  
カランカランと音を立てて、真っ二つになった木刀が地面に落ち

る。

空雅も周りの男達も見くびっていたのだ、サンタの能力を。

——サンタたる彼女の力を。

彼女の手にはその身に不釣り合いな大きさの大剣。沈みゆく夕陽を浴び禍々しく煌めく両刃の剣を持つ西洋甲冑はまさしく騎士<sup>ナイト</sup>。

ガチャリと音を立て大剣を構え直す。

「なっ、なんだ!？」

不良達は切り落とされた元は木刀であったものと、突然出現した巨大な剣。そして、その剣を携える甲冑に目を見開き、一步後ずさる。

目の前のこの異質なモノは次元が違った。

「サンタの能力は恐ろしく便利だね……」

もはや完全に蚊帳の外な空雅は少し離れた場所でポソリと呟いた。

あらゆる物質を構成する能力を持つ者、それがサンタ。

なにも顕現化できるものはコーヒーに限った話ではない。必要とあらば武具さえも作り出せるのだ。

「何があってもベルさんは怒らせないようにしよう……」

出会って1日で自分と許嫁である彼女との力関係を迅速に正しく

理解した空雅は、今日からは慎ましく生きることを決意する。  
それは実に懸命な判断であった。

ガシャーン

激しい音。

その突然の物音に釣られて音源の方を見ると、路地の脇に置かれているゴミ箱に頭から突っ込んだ西洋甲冑の姿が目映った。

「……………」

何ともシュールな光景である。

言葉が出ないとはまさにこのことであつた。

それは不良達も同じだつたようで、空雅とともに呆然と西洋甲冑を見続ける。

「……………」

のろりと甲冑が起き上がる。頭の上に乗ったゴミを蔽つて鉄甲で払いのけると気を取り直したように再び不良達に剣を向ける。  
そして男達目掛けて走っていくと刺突。続いて剣を横になく。

「……………」

しかし、全くと言っていいほどベルの攻撃は当たることはなかった。

当然と言えば当然である。いくら武具が出せようと、いくら奇抜な格好をしようと中身はただの少女なのだ、あんな大剣を操れる筈

もない。

畢竟、『剣を振り回す少女』改め『剣に振り回される少女』は自分の身の丈よりも遥かにデカい剣に体を持っていかれるあり様となっていた。

「何だアリヤ……？」

馬鹿な不良どもとも言えどそろそろベルの大仰な見かけ倒しにも気づいてくるわけで、

「あーあ、ビビって損したじゃねえか」

「よくも木刀折ってくれたな、ゴルア」

一歩後ずさっていた不良達が再びベルの周りを囲む。  
しかし、その輪の中に空雅の姿はない。

「……僕、忘れられてる？」

もはや空雅は不良達の目には映ってはいなかった。不良達の目には自分達を散々に驚かしてくれた西洋甲冑の姿しか映っていない。  
完全な置いてけぼりである。

「もう、帰ろっかな……」

不良達がベルに詰め寄る。

「……僕、完全に忘れられてるしさ」

不良達が一斉に拳を振り上げる。

「今日初めて会った人に付き合ってボコボコにされる理由もないし……」

そして不良達の拳がベルに向けて放たれる

——ことはなかった。

「がはっ！！」

周りを囲んでいた不良達が悶絶の声を上げ弾け飛んだ。

「何だ、てめえ！？」

苦痛に顔をしかめながら、弾け飛んだ内の一人が自分を吹き飛ばした元凶たる男に問いかけた。

その男はベルの前に立ちふさがるように立つと振り上げた脚をゆっくりと地につける。

「僕も甲冑の中が女の子じゃなきゃとっくに帰ってるよ……」

艶やかな漆黒の黒髪に黒曜石のような輝く瞳を持つ少年、空雅はにっこりと柔和に笑う。

「それに彼女は僕の許嫁らしいからね、傷つけるわけにはいかないよ」

ゴキリと首を回して両手に持った買物袋をそつと地面に下ろす。

そして、ずっと半歩前に出ると凜とした声で言い放つ。

「こいよ、悪党。返り討ちにしてやるよ」

それは完全な挑発。ニヤリと空雅は不敵に口の端を吊り上げる。そして見事に不良達はそのあからさまな挑発に食いついた。次は空雅も取り込んでグルリと円を作る。

「てめえ、なめんなよゴラァ!!」

一人の男が右ストレートを放つ。しかし、その振り上げられた拳は虚しく宙を切り裂く。

空雅は身を捻り肉薄する拳をかわすと、相手の顔面にハイキックを叩き込む。

「まずは一人、と」

パンパンと埃を払うように手を叩くと、周りを見渡す。不良達の人数は数にしてあと五人。一人ずつ相手にするのは正直しんどい。

「僕は早く帰って夕飯の支度をしたいから、悪いけど本気でいくね？」

仲間である男の一人がいとも簡単に叩きのめされて怯える不良達に、空雅は笑顔で死刑宣告を言い渡す。

既にこの空間は空雅の支配下であった。

「ベルさん、ちょっとその剣貸してくれる？」

ベルの方へ振り向きにこりと笑う空雅。ベルは彼の要求通りに例

のごとく無言でコクリと頷くと先ほど顕現化したバカデカイ大剣を手渡した。

「……うっ、ホントに重いね。コレは」

大剣を手にした空雅は予想外の重さに僅かに顔をしかめる。  
もう少し、軽いヤツとか出せなかったんだろうか？

そんな素朴な疑問が浮かび上がったが、それは後で訊けばいいだろう。

それよりも今は……。

空雅はキツと目の前の敵を見据える。  
そして見るもの全てを震え上がらせる冷笑。

「さあ、そろそろ下らない茶番も終わりにしようか」

コツリと靴音を立て一歩前に出る。

右手に煌めく大剣を持った少年は冷たい笑みをずっと引つ込めると、スーツの胸ポケットから一枚の御札おふだを取り出した。

長方形をかたどった札は空雅の指に挟まれて、漆黒に禍々しい淡い光を放ち出す。

「幕引きだ」

ヒラリと漆黒の光を放つ札は宙を舞った。

既に陽が暮れかけ、薄暗くなった路地裏には静寂が舞い降りていた。

その厳肅な静寂の中では何人たりとも一切動くことを許さない。  
圧倒的な威圧感を放っていた。

そんな静寂の中、唯一動ける人間がただ一人。

その人間の名を黒崎 空雅という。

艶やかな黒髪に黒曜石のごとく輝く瞳をもった少年は優しそうな顔立ちをしている。

しかし、それはあくまでも顔立ちだけの話である。現在、空雅が手にしているものを見て、果たして何人が彼のことを『優しい』などと言い切れるのだろうか？

否。そう言い切れる人間は、おそらく皆無。

何故ならば空雅の手には物騒なことこの上ない大剣が握りしめられているからである。これを見て『優しい』と言える人間は間違いなく眼科に行くべきであろう。

「ベルさん、少し危ないから僕の後ろに隠れてて」

空雅は背後でそびえ立つ西洋甲冑にむかって、そして許嫁にむかって声を掛ける。

それに対しコクリと頷くベルを見て、空雅は満足そうにニコリと笑う。

「……じゃあ」

再び周りを囲む不良達に向き直る。

空雅の顔に浮かぶものは先ほどベルに向けていた笑顔とは違う種の、見るものを凍てつかせるような絶対零度の笑み。

不良達に戦慄が走る。

「幕引きだ」

空雅はすつと笑みを引つ込めるとスーツの懷からミニズがのたつたような朱色の文字で縁取られた一枚の札を取り出し、中空に放り投げた。

ヒラヒラと舞うそれを片手に持った大剣で優しく撫でる。

「術式、風絶斬空波」

札は真つ二つに切り裂かれる。

――刹那、切り裂かれた札の断面から風の刃が生み出された。

風の刃は凄まじい勢いで空を切り裂くと、狭い路地を囲む建築物の壁を、路地裏に置かれたゴミ箱を、不良達が持った鉄パイプを容赦なく両断する。

そして風の刃が辺りのものを全て薙いだ瞬間、突風が巻き起こる。

突風により周りを囲む男達が弾き飛ばされ、路地を囲むようにそびえ立つ建物の壁に打ちつけられた。

「くっ、お前は一体……！」

壁に打ちつけられた男達はここにきてようやく理解する。

この戦いは分が悪過ぎる、と。

気を既に失っている男達の中でまだ僅かに意識のあった男が空雅に問うた。

その問いに対し、黒髪の少年はニヤリと偽悪的に微笑むと可愛らしく小首を傾げながら答える。

「友達にサンタがいるような父親の息子が、普通なわけないっしょ？」

路地裏を囲む建築物には一筋の深く鋭い傷跡が残され、真っ二つになったゴミ箱は直後に風に巻き上げられてその中身を辺り一面に飛び散らしていた。そして、飛び散ったゴミの下でうずくまる男が数人。

その光景はまさに地獄絵図、悲惨たるものだった。

そしてその嵐が通り過ぎた後のような路地裏で空雅は最後の一仕事とばかりに「えいっ」と大剣を投擲する。

「お休みなさい」

その声を最後に微かに息のあった男の意識は刈り取られる。

クルクルと回転しながら投げつけられた大剣の柄が男の額に直撃したためであった。

「ベルさん、大丈夫だった？」

最後の不良が倒れるのを見ると、空雅はくるりと振り返りベルの方へ向き直る。

空雅は柔和な穏やかな表情でベルに優しい声で訊ねる。

「——（こくこく）」

それに対してベルは強く頷き返す。相変わらずなベルの反応を見て空雅は苦笑混じりにクスリと笑うと地べたに置いていた買い物袋を拾い上げる。そして中の食材を素早くチェックすると、スタスタとベルに背を向けて歩き出す。

そして少し距離をとるとくるりと空雅は振り返った。

「じゃあ、帰ろっか」

沈みゆく太陽を背に背負った空雅の表情は、逆光のため一切解らない。

「“僕たち”の家に」

だが、ベルには空雅が優しく微笑んでいたように見えたという。

「——ありがとう」

そして、この鈴のように透き通った可愛らしい声が、空雅が初めて耳にしたベルの声だった。

+

冬の夜は早い。

西に沈みゆく夕陽を追うように東には月が昇り始め、空は太陽と月の二つを抱えて暗くなり始めていた。

そして茜空とも夜空ともとれない空の下で空雅とベルは歩いていた。

風は冷たく肌を切るように痛い。

「ベルさん、寒くない？」

「——（こくこく）」

ガシャカシャと首を縦に振り、空雅にグツと立てた親指を突き出すベル。どうやら寒くないということらしい。

よほどあの甲冑は断熱性に優れたものなのだろうか？ 機会があれば借りてみよう。

「——（くいくい）」

などと空雅が寒さに身を震わせながらぼんやりと考えていると、不意に引つ張られるような感覚。

振り向くとベルがギュツと袖を掴んでいた。

「……えと、ベルさんどうしたの？」

初めてのベルからのアクションに戸惑う空雅。

今まで、と言ってもベルと出会ってからまだ1日と経っていないのだが、ベル自身から行動を起こすことは決してなかった。確かに、空雅が何かを行えばそれに対しアクションを起こしてはいたがそれはあくまで受動的な反応に過ぎない。

自ら行動を起こすことはまずなかったのだ。

それがどういったわけか……

「……寒い？」

心配そうに見上げるベル。実際は鉄仮面をつけている為に表情は一切解らないのだが、少なくとも空雅には心配そうに見えた。

「ん、大丈夫だよ、ベルさん。心配してくれてありがとうね」

空雅は優しくベルの頭を撫でる。

「……ふみゅ」

甲冑の上からではあるものの実に気持ちよさそうな声を出すベル。空雅はそんなベルを見てそっと顔をほころばせる。何というかネコみたいで可愛い。

……でも。

ふと空雅は思う。

どんな心境の変化があったのだろうか？ あの無口なベルが自分から話かけてくれるなんて。

これは少しは心を開いてくれたということだろうか？  
だとしたら、相当に嬉しいのだが。

「ベルさん、もう暗くなつたから早く帰ろっか？」

「——（こくこく）」

そして二人は一路家に向けて歩を進めるのであった。

+

心境の変化、というにはいささか大仰過ぎるかもしれない。  
しかし、少なからずベルの中で何かが変わったのは確かだった。

——その日、ベル・ヴィルヘムは初めての恋をした。

昔から、それこそ生まれたときからベルという少女は両親から許婚の話を聞かされていた。

だが、聞かされていたからと言ってその人のことを好きになるとは限らない。むしろ統計学的に見れば好きにならない可能性の方が高いだろう。

だから、ベル・ヴィルヘムは16歳になった年のクリスマス、兼ねてから許婚と自分が初めて会うことになっていた日。

その許婚がどういった人間なのか見極めるべく彼の家に押しかけたのだ。

そして見極めようとした結果……、彼女は黒崎 空雅という少年に惚れてしまった。

きつかけがあるとすれば、先ほどの不良に囲まれたとき。

その時に見せた彼の凛々しい姿に惚れたのではない。極めつけは、その後に見せた優しく可愛らしい笑顔に、完全にやられてしまったのだった。

『ベルさん、大丈夫だった？』

彼の柔らかい声が何度となく頭の中をリフレインする。

彼は、空雅は、いつも自分を気にかけてくれた。さっきだって寒くないかと気遣ってくれた。道を一緒に歩くときはさりげなく車道側を歩いてくれる。

その優しさ全てが全くとっていいほどに男性経験がないベルには刺激が強すぎた。あまりにも強烈すぎた。

俗に言う『ベタ惚れ』というやつだった。

隣を鼻歌混じりに歩く空雅をチラリと見る。

「ん？ なに、ベルさん？」

ベルの視線に目ざとく気がついた空雅はにつこりと破顔一笑。ベルは自らの顔がかあつと熱くなるのを感じる。

しかし鉄仮面を付けている為、空雅にはその表情は解らない。ただベルはふるふると首を横に振って答えた。

「そつか、何でもないならいいんだけど。あ、家が見えてきた。ほら、あそこ」

空雅が指差した方向には高い塀に囲まれた広大な土地を持つ純和風の屋敷が見える。相変わらずにデカい屋敷は厳格な雰囲気を感じていた。

どんな悪いことをすればこんな家を持てるのか、と思わず考えて

しまいそうな屋敷の巨大な門の下に一人の見慣れた人影が一つ。  
その見慣れた人影もこちらに気がついたようでゆるゆると手を挙  
げると嬉しそうに笑う。

「やあ、ご両人。お帰りなさい」

近づくにつれて徐々に人影の姿ははっきりと見えてくる。金髪碧  
眼の人影は空雅達を見ると人懐っこい笑みを浮かべる。

それに相反して空雅は若干眉をひそめると訝しそうに呟いた。

「……………何をしてるんですか、バンさん」

そう、黒崎邸の玄関の下ではバンが待ち構えていたのだった……。

## 最初の晩餐 / 01

「立ち話も何ですし、どうぞ上がってってください」

真冬の日は短い。

夜の帳を落とし始めた空は暗く、ただただ黒い宵闇が包み込む。それは純然たる“夜”そのものであった。

その暗い闇の中、闇と同化してしまいそうに黒い艶やかな漆黒の黒髪と黒曜石のごとく輝く瞳を持つ少年、黒崎 空雅が、ニコニコと笑っている金髪碧眼の男に言った。

「お茶ぐらいなら出しますよ？」

「や、少し用事があつてきたただから結構だよ」

それに対し金髪碧眼の男、バン・ヴィルヘムはひらひらと片手を振りながら空雅の誘いに断りをいれる。

「今夜からベルちゃんはここに住むことになるからね。だから今日は家具一式を運びに来たというわけだよ」

そう、バンが黒崎邸に訪れた理由はベルの家具を運ぶ為であった。まあ正確に言うのであれば、運んだのではなく、その場で家具一式を構成したのだ。

サンタたるバンにとって家具を構成することなど朝飯前、造作もないことである。

「というわけで、空雅くん。ベルちゃんの日用品は買いに行かなくても大丈夫だからね！」

ぐつと親指を突き出してバンはこれでもか、とスマイル。白い歯が暗闇の中で煌めく。

そして空雅はそんなバンを見ながらしみじみと思った。

やはりバンとベルは親子なんだな、と。

ぐつと親指を突き出すアレは今日1日で既に二度はやられている。一度目は鎧娘ことベルに、あと一度は言わずもがなその父親であるバンに。

ベルは喋りこそしないが、その動きをじつと観察しているとなかなかコミカルな動きをする。これは確実に父親譲りであろうと思う。

となると、やはり顔も似ているのだろうか？

など考えるのは人間の真理なわけで……。

「……………」

「——（もじもじ）」

じいつと見つめる空雅に、鉄甲を頬にあて恥ずかしそうに身をくねらすベル。

バンが言うに曰わく、ベルはバンに似ているそうなのだが、それが本真なのだとしたらベルは相当に美形ということになる。

「……………」

まあ鉄仮面で顔を隠しているので事実闇に消えたまま知る由もないのだが。

「じゃあ、空雅くん。私はそろそろおいとまさせて貰うよ！」

空雅はその声に反応し、顔を挙げる。

見るとバンがしゅばつと別れの意を込めて片手を挙げていた。

実のところを言うと、バンはまだ空雅と話たいことは山ほどあったのだが、ベルを見ていると気が変わったのだ。

（あの極度の人見知り兼極度の恥ずかしがり屋のベルちゃんがね……。流石は雅俊くんの息子と言ったところか……）

ベルは昔から筋金入りの人見知りであった。

そのせいか鉄仮面で顔を覆ってしまったたり、度を越えた無口だったりする。社交的で人当たりの良いバンとは正反対であった。

それが、今ではというと……

「くしゅんっ！」

「……………風邪？」

おそらく父親譲りの鈍感さを誇る空雅には気づき得ないことだろうが、確実に今朝と今とでは二人の距離は縮まっていた。

まだ無口な気はするが、あのベルが自分から喋りかけているのだ。これは目覚ましい進歩である。

心なしに空雅に身を預けるようにして立つベルを見てみると、ようやく巢立つことができそうな娘に対する喜びや嬉しさ、それとともに親離れしていく娘への何とも言えぬ物悲しさを感じる。

でも……、どんどん自分から離れゆく娘への哀感はあるが、それでも親にとって娘が育つというのは寂しさ以上に喜びの方が大きいのだ。

「じゃ、私は帰るとしよう！ うん、馬に蹴られて死にたくないしね」

そこでベルに、パチリとウィンクを一つ。

「あでいおすっ！」

びつとポーズを決めるとすたすたとバンは歩き始める。

何と言つか、サンタのクセに移動手段が徒歩というのはどうなのだろうか……、とか思うところも多々あるがそれは些末な問題に過ぎなかった。

そして途中まで背を向けて歩いていたバンなのだが、何かを思い出したかのように踵を返すと慌てて空雅のもとに駆けつけた。

「ふう、危うく忘れるところだったよ。はい、クリスマスプレゼント」

空雅の首に柔らかいものが巻きつけられる。  
白いマフラーだ。

「うんうん、私ともあるうものがすっかりプレゼントを渡し損ねるところだったよ！」

ニコリと笑うバンを見て、空雅の脳内で『慌てん坊のサンタクロース』などと言葉が浮かんでは消え、消えては浮かんだ。

「でもこのマフラー、少し……かなり長くないですか？」

自分の首に巻きつけられたものは余りにも長すぎる。

キリンの親戚サイズかと思うほどに長い。これなら二人で捲いても十二分に余りあるだろう。

「ん？ いや、二人で捲いてもっていうか、それは二人用だけど？」

実にいい笑顔で、しれっと言ってのけるバン。

「何でも、空雅くんの両親はマフラーが縁で結びついたらしいからね。それを空雅くんとベルちゃんにもと思ってね」

バンは、どうだと言わんばかりに得意気に胸を張る。

まあバンの心遣いは素直に嬉しいし、実際にいいアイデアなのだろうが……、何というか超恥ずかしい。

だいたいアレだ。

今日知り合ったばかりの女の子と一緒にマフラーを巻くって、道徳的にも倫理的にもいけない気がするのだが。

「そうかい？ まあ、でもいつか一緒に巻ける日が来たらいいね」

「そうですね、その日までこれは大事にとっておきます。プレゼン

ト、わざわざ有難うございました」

空雅は慇懃<sup>いんぎん</sup>な態度で深々とお辞儀をする。そのお辞儀はまるで英国の老紳士さながら、お辞儀一つとっただけでも空雅の高い教養は窺えた。

バンはそんな立派に育った親友夫妻の忘れ形見に手を振って答えた。

「いや、お礼を言わなくちゃいけないのはこちらだよ。さっきはベルちゃんを助けてくれてありがとうね」

次はバンがぺこりと頭を下げる。

バンのお辞儀はお世辞にも慇懃とは言えない子供っぽい稚拙なものだったが、その誠意は充分に伝わってくるものだった。

「さっき、というと……？」

「空雅くんたちがガラの悪そうな連中に絡まれてるときだよ。あのときベルちゃんを助けてくれたでしょ？」

にへらと笑いながら答えるバン。

どうでもいい余談ではあるが、この男、登場してからというもの常に笑い続けている気がする。

「……見てたんですか」

空雅は白い溜め息と共に言葉を吐き出す。

バンはあの場に居合わせた。なのに自分はバンの気配に気づくことができなかったのだ。

空雅は「まだまだだな」と自嘲気味に呟き、笑う。

「や、そんなことはないよ。空雅さんの道術、なかなかだったよ?」

驚く空雅にバンは優しく微笑む。

「まあ、雅俊くんも道術を使っていたからね。私が知っていてもそんなに驚くことじゃないだろう?」

なるほど、そういうことなら知っていてもおかしくないかもしれない。

空雅は合点が言ったように、ゆっくりと頷いた。

## ——道術。

もしくは、神仙術とも言われるこの術のルーツは遠く昔、中国にまで遡る。

中国には古来より『儒教』『仏教』『道教』と三大宗教と呼ばれる学問が大成しており、道術とは三大宗教が一つ『道教』の考えに元づくものである。

仏教が主流の日本国では道教の信仰者は稀有な存在だが、中国ではそう珍しくもない。

仏教の教えでは悟りを開いて六道輪廻から解脱し、涅槃に到達することを目的としている。身も心も浮き世から完全に離れ、三千世界の彼方へ到達することを最終目的としているのである。

一方道教はというと、仏教と同じくこの浮き世から離れることを

目的としている。

しかしやや異なるのは、仏教では仏となり涅槃に到達することに重きをおいているが、道教というのは不老不死の仙人となり浮き世から離れて山奥で悠々自適に過ごすことに重きをおいている。

そして、不老不死に到達するために生み出された術こそが、神仙術……つまりは道術なのだ。

「私も初めてあの術を見たときはたまげたね。ただの下等な人間だと思っていた男がまさか私をぶっ飛ばすなんて、俄には信じられなかったよ」

懐かしそうに頬をさすりながら呟くバン。

その言語的ニュアンスとバンの行動を鑑みるに、おそらく過去にバンは雅俊に殴り飛ばされた経歴があるのだろう。

それを察した空雅はクスリと笑う。

「本当に父と仲が良かったんですね」

「ああ、雅俊くんは私の生涯の友だよ」

ニコリと満面の笑みで返す。

そんなバンを見て空雅は羨ましく思った。  
胸を張って『友』と呼べる人間がいるということは凄く素敵なことだと思う。

「じゃあ、プレゼントも渡したことだし、今度こそ私は帰らせてもらっね」

「ええ、お氣をつけて」

無邪氣に手を振るバンに、苦笑混じりに手を振り返す空雅。

一体どちらが子供か解らない殺伐とした眺めだったが、何とも微笑ましい光景でもあった。

と、そこへトテトとベルが小走りに駆けつける。

今まで空氣を読んで口を挟まなかったのか、生来の無口さゆえ口を挟まなかったのかは謎だが、ベルは厳つい鉄甲で掴んだ一切れの紙をバンに差し出した。

見るとバンの顔が瞬く間に悲痛な表情へと変わりゆく。

「……何が書いてあったんです？」

空雅が恐る恐る訊ねるとバンは痛々しい表情のまま、空雅にも見えるようにぴらりと紙を裏返す。

『母上にも宜しく言つといてください』

そこには、綺麗な楷書でそう書かれていた。それを見て空雅は「はて？」と首を傾げる。

何がそんなに悲しいのかさっぱり解らない。

寧ろこれはベルが母親のことも気にかける優しい子に育って良かったと喜ぶところではないかと思うぐらいである。

その旨を空雅が伝えると、バンは虚ろな目でふるふると首を振り否定した。

「……空雅くん。きみも親になれば解るさ」

その言葉にいつもの覇気はない。

確かにベルが優しい子に育ったこと自体は諸手を挙げて喜ぶべきことなのだが、違うのだ。

紙切れを通して話かけられたことがバンには堪らなく悲しかったのだった。

（空雅くんとは話すのに、どうして私は紙伝手なんだ……。ああ、なるほど。これが世に悪名高き『鼯鼠』というやつだね、ベルちゃん）

そこまで考えて何とか今までこらえてきたものが枷を外したかのように溢れかえった。

それは涙という名の水ではないもっと寂しい粒。比喻ではなく、まさに滝のように涙を流しながらバンは考える。

今までベルちゃんは無口ゆえにあまり話してくれないのかと思っただけ、それは単なる反抗期からくるものかもしれない、と。

（きつと心の中では「親父キメエwww」とか思ってるに違いないんだ……）

そう考える男は既にいつものポジティブ全開なバンではない。寧ろネガティブ全開、一人後ろ向き大会である。

そして空雅とベルはというと、かなり引いていた。

いきなり大の男が大粒の涙を流し始めたのだ。普遍的な人間であれば、これは間違いなく引くところであろう。いや、普遍的とは言

い難い空雅やベルでさえも引いているのである、これは相当であった。

「うわあああーっ！！！」

遂に襲いくる何かに耐えられなくなったバンは発狂しながら全力で夜の街を駆け出す。

バンが走り去った後には暗い闇に残された空雅とベルがポカンと置いてけぼりをくらっていた。

兩人とも「何がなんだか」といったふうである。

「……さ、じゃあ早いとこ家に入ろうか。風邪をひいたら大変だからね」

虚無感漂う闇の中で、先ほどのバンは見なかったことにして、さも何事もなかったように振る舞う空雅。

「——（こくこく）」

月夜に金属を鈍く反射させながらガシャガシャと頷くベル。どうやら彼女も先ほどの父の醜態は見なかったことにしたい。

それは実に賢明で妥当な判断だった。

そしてそんな二人を、満月と言うには余りにも不格好で綺麗な月が優しく包み込んでいたという。

「ベルちゃあーんっ!!!」

「うるさいっ!」

その後、発狂して近所迷惑この上なかったバンはこってりと奥さんに絞られたというが、これはまた別の話。

## 最初の晩餐 / 01 (後書き)

今回の作中に出てきたマフラーは、明日投稿予定の短編にも出てきます。

よろしければ、そちらもどうぞ。

……と、宣伝してみる(笑)

## 最初の晩餐 / 02

神楽市を中央に縦断するように流れる成瀬川の東側は住宅街、西側は工業地帯と区分される。

その東側、つまりは住宅街から少し離れた小さな山の中腹部には一軒の広大な敷地を誇る屋敷がどっしりと構えている。

貫禄のあるこの屋敷は風流とはまた違う独特の雰囲気放つていた。威厳でも厳格でもない。

これを一言で言うのなら『異様』。なにが異様なのかは解らないが、とにかくこの人里離れた山奥にある屋敷は異様なものだった。

黒崎邸。

もしかすると、何らおかしな点が見当たらない屋敷が異様に見えるのは、住人たちが異様で異質な所為なのかもしれない……。

「……寒いね」

さて、その異様な屋敷の主たる艶やかな漆黒の髪と黒曜石がごとく輝く黒い瞳を持つ少年は寒さに手をさすりながら、純和風の屋敷の一角で呟いた。

その一角であるこの屋敷唯一の洋式の部屋、リビングでは脚の短い机を挟んで向かい合うようにソファ―に腰掛けた男女が一组。

「ベルさんは寒くない?」

男女の片割れでもある屋敷の主たる少年、黒崎 空雅は正面に座った西洋甲冑を身にまとった許嫁に訊ねる。

この許嫁こと、ベル・ヴィルヘムは金属特有の鈍い光沢を放つ兜を、今にも首がとれそうな勢いでブンブンと激しく横に振って答えた。

「そっか、寒くないならいいんだけど」

そんなベルを見て苦笑混じりに笑う空雅。

何というか、仕草の一つ一つが微笑ましい。まるで幼い子供みtaiである。

「そうだ、ベルさん。先にご飯を食べる？ それとも先に部屋の方に荷物を運んでしまおうか？」

チラリと横目で机の脇に置いている段ボールを一瞥しながら言う。これは今日から黒崎邸で暮らすことになったベルのために、その父親であるバンが用意したものだった。

段ボールの数は全部で三つ、その他にはタンスが一竿だけ。女の子の荷物にしては随分と少ない僅かなものだった。

このくらいの量ならせいぜい小一時間もあれば部屋が完成するだろう。

「どうする？」

「……………うにゃあ」

猫のような奇声を発しながらベルは考える。

それから暫くの時が流れた。そしてベルがくだした結論はという  
と……、

「……………」飯」

とのことである。

ベルの言葉にニッコリと頷くと、空雅は腕まくりをしながらソファから立ち上がる。そして白く細い腕で力こぶを見せる素振りをすると、空雅は優しげに頭を傾けた。

「今日はベルさんが来たんだから、張り切ってご馳走を作るね？」

その空雅の柔和な笑みはベルの理性を崩壊させるには充分過ぎるものであった。

あまりにも可愛い笑顔にベルはのたうち回る。

「……………」これはヤバイ。

次々とベルの脳内をとめどなく妄想達が駆け抜けていく。

こうなったら他の何かで気を紛らわせて、今ある溢れ出しそうな煩惱と邪念を振り払う他ない。

そう考えたベルはのたうち回りながら、何か気を紛らわせそんな物はないかと当たりをキョロキョロと見回す。

何というか、実に器用な奴である。

「……………」

机を挟んで向かい合うように配置された一組のソファ。薄型のテレビ。脚の短い机。

それに、段ボール三箱にタンスが一竿。

それ以外に何一つない、殺風景すぎる部屋。

これでは何かに打ち込むことができない。気を紛らわせられるようなものなどないのだ。

「……ベルさん？　どうかした？」

突然のたうち回るベルに空雅は眉根を潜めて怪訝そうな面もちで訊ねた。

しかし、この困ったような怪訝そうな顔もベルには堪らなく効いたようで、

「~~~~っ!？」

声にならぬ叫びで発狂。

恋する乙女はすべからく美しい、との格言があるが、恋する乙女というのは皆バカでもある。

畢竟、ベルもそのバカな乙女の一人なわけで。

「……ベル、さん？」

もう、しつちやかめつちやかでてんやわんやなベルはヤケクソとばかりに盆踊りを披露する。

こうなったら破れかぶれ、どうにでもなれとばかりにテンポよく踊っていくのだった。

「は、ははっ。ベルさんは寒いのに元気だね」

空雅は若干頬を引きつらせながら、乾いた笑いとともにありきた

りな感想を添え合わせる。

こんな時……、西洋甲冑が板張りの床でのたうち回った挙げ句に盆踊りを踊り始めた場合、どんな言葉をかければよいか空雅には解らなかった。

だから無難な感じのありきたりな感想でお茶を濁すことにしたのだった。

（まあ、何と言ってもあのバンさんの娘なんだから、このエキセントリックな行動もあり得るか）

と、無理やりに自分を納得させた空雅はベルに向き直ると微笑のままに訊ねた。

「じゃあ、僕は晩御飯を作ってくるけど、何か食べたいものでもある？」

せつかく今日はベルが黒崎邸にやって来たのだ。

今ある食材のあり合わせでしか夕飯を作ることはできないが、どうせならできる限り豪勢な夕飯を作ろう、と空雅は決めていた。

「……………たべたいもの？」

しかし、豪勢に作ろうにもベルの嗜好が解らないのでは、話にならない上に元も子もなかった。

そういう意味合いで軽い気持ちで聞いたのだが……。

「……………にゅっ」

盆踊りをピタリと止めたベルは口ダンの考える人　よろしく頭に手を当て考え始める。

まさか、ここまで本気で悩み始めるとは夢想だにしていなかった  
空雅は少々面食らう。

空雅の周りには一癖も二癖もある女の子たちがそれなりにいるが、  
このベルという娘は中でも一際手ごわかった。

なぜなら次の行動が一切読めない、まさに予測不能なのだから。

ベルの思考回路ならびに行動パターンが全く読めないのも当然の理<sup>ことわり</sup>。  
何もかもが普通ではない常識から逸脱した存在、サンタなのだから。

「~~~~~」

さて、そんな空雅の常識を覆し三千世界の彼方までぶっ飛ばした  
少女に何か動きがあった。

どうやら空雅に何を作って貰うか決めたらしい。

はてさて、そのメニューやいかに……

「~~~~~空雅様にお任せいたします」

思わず空雅はずっこける。

結局、ベルが悩みに悩んだ末に選んだ選択は『丸投げ』、全ての  
判断を空雅に委ねるというものだった。

これはベルが食べたいものが多すぎて決めかねたというのもある  
が、他にももう一つ理由が。それは至極簡単で単純明解な理由、こ  
れなら精一杯もてなそうと空雅が自らの一番得意な料理を作ってく  
れそうだったからである。

「うーん、任せられてもなあ……。よし、じゃあ僕が一番得意な料  
理でも作るね？」

予想通り。

空雅の問いにベルは頷く。もはや空雅の作る料理なら、雑草をそ

のまま茹でただけのものでも食べられるであろう自信がベルにはあった。

本当に恋する乙女というのはバカなものである。

十

何はともあれ、空雅が台所やキッチンと呼ぶにはあまりにも広すぎる厨房に消えてから暫く。

どうやら、やっと夕飯の支度が整ったようであった。

「ベルさん、ご飯出来たよ」

食卓からはベルを呼ぶ空雅の声が響く。

それとともに食欲をそそる香辛料独特の香り。

（——これはっ！）

食卓にたどり着いたベルが見たものは豪華絢爛な料理の数々……

と、いうわけでもないごく普通のカレーとハンバーグであった。

しかし、どういったわけかいつもにも増して美味しそうに見える。

（——……こ、これが愛という名のスパイス！？）

など考えるベルは相当アレな感じである。いや、これがベルにとっては初恋なのだから仕方ないと言えは仕方ないのだが。もはや『空雅病』と言っても何ら差し支えのないベルである。

「それじゃあ、どうぞ」

リビングに置いてある机とは違い、食卓に置いてある机はやたらと脚の長いもの。それに合わせたのであろう椅子もかなり高かった。

「……………」ありがとう

スツと空雅が引いてくれた椅子に腰を降ろすベル。

「うん。じゃあ食べよっか？」

「……………」（こくこく）」

長机を挟んで空雅は行儀よく手を合わせる。それにっられてベルも手を合わせ、

「頂きます」

「……………」頂きます

ベルにとって黒崎家での最初の晚餐を迎えるのであった。

+

さて、問題が一つ。

それが何かと問われれば、当然ベルが身にまとう西洋甲冑にあった。

いや、正しくはベルの顔を覆い隠す鉄仮面。

当たり前だが、兜を付けたままでは夕飯を食べられないのだ。

ベルはどうしたものかと考える。

自分は極度の人見知りであり、恥ずかしがり屋である。人の前に顔を出すなど恥ずかしさの極み、それが想い人の前なら尚更。兜を外すのは些か以上に躊躇われるものがあつた。

しかし、折角の空雅が心を込めて作ってくれた料理を自分の羞恥心ごときのせいで食べられないとあつては末代までの恥。言語道断、貼り付け獄門の刑に匹敵する罪である。

……ならば仕方ない。

「うん、我ながら無駄に旨いね」

目の前で美味しそうに「むぎゅむぎゅ」と米を頬張る空雅を見て、つい自然と頬が緩み顔が綻ぶ。

（―― よし、決めた）

それは少女にとって一世一代の大決心。ついに鎧と決別するときが来たのであつた。

「!？」

空雅の目が驚きで見開かれ、カチャンと手に持ったスプーンが落ちる。

兜をとった瞬間に現れたのは眩いばかりの金。

続いて現れたのは蒼く澄んだ瞳。そして、陶器のように白い肌にスツと通った鼻筋。

天使、と形容したくなるその容貌はまさに神の造形美。

『美人』と言うよりも『可愛い』と表現した方が適切な少女はゴトリと外したばかりの兜を床に置いた。

「——（もじもじ）」

そして顔を朱に染めながら上目遣いに前を見る。

極度の恥ずかしがり屋の上に初めて空雅に顔を見せるのである。

そこは恋する乙女としては、やはり空雅の反応が気になるというものだった。

もしも、空雅の好みの女の子じゃなかったら……。

そう考えるだけでキュツと胸が締め付けられるように苦しくなる。

しかし、そのようなことはただの杞憂に過ぎなかった。

お忘れの方も多いだろうが、今一度言おう。彼は『無類の可愛いもの好き』なのである。

天使がごときに愛くるしい形容のベルが、空雅の可愛いものレーダーに反応しない筈がなかった。

（ヤバイ、凄くぎゅうってしたい……って、危ない危ない！　いつものぬいぐるみ感覚で抱きついたら、僕変態さんだよ！？）

空雅は激しく心の中で葛藤する。

凄く抱きしめたいくらいに可愛い。しかし本当に抱きついちゃったら最後、即警察行き片道切符を手渡されることになるのだ。なん

としても、それは避けたい。

そして長らくの間、葛藤を続けた空雅はついに煩惱に打ち勝った。

しかし、そんな空雅の心の中などつゆ知らずベルは不安になっていた。

自分が兜をとった瞬間、空雅は険しい顔でうなりだしたのである、これで不安にならないわけがなかった。

でもそれはただのとりこし苦労に過ぎなかったらしい。

しばらく唸っていた空雅は見えざる何かに打ち勝ったようで、いつもの優しい顔になると、

「ベルさん、ずっと仮面を付けてると折角の可愛い顔も台無しだよ？」

と、微笑みながら言う。

その言葉を聞いた瞬間にベルの中の不安な気持ちが霧散していく。空雅が可愛いと言ってくれたのだ、嬉しくない筈がなかった。

「さ、じゃあ冷めない内に食べよっか？」

「——（こくこく）」

ベルは銀に輝くスプーンにカレーを乗せて、パクリと一口。

「！」

衝撃が体を走り抜ける。

「美味しい？」

「——（ごくごくごくごく）」

いつも以上に頷くベル。

それを暖かく見守る空雅。

こうして黒崎家の夜は更けていく。

彼の笑みはとても魅力的で、口に運んだカレーはとても美味しく、庭園を一望できる露天風呂は気持ちよくて……。

ここはとても居心地が良かった。

そしていつしか二人は、これからの愉快で楽しい日々の予感に顔を合わせて笑いあっていた。

## 日常回帰 / 01

全ての事件は一本の電話から始まった。

深い木々に覆われた山の中、人里離れたその地に悠然とそして荘厳に建つ屋敷が一つ。

その広大な敷地を誇る純和風の平屋は果てしなく大きく、周りはグルリと背の高い併で囲まれていた。

併の内側はいく帳面に整えられた綺麗な庭園に、風流を感じさせる置き石、澄んだ池は、何とも言えぬ日本の美を遺憾なく感じさせた。

そして、暗幕を引いたような夜空が白み始めたころ。

東から昇る陽の光を浴びて、その広大な敷地を有する黒崎邸では朝を迎えていた。

雀のさえずりが耳に心地よく、自然と脳の覚醒を促す。

「ふああゝ」

気の抜けた声と共に伸び。眠たそうな眼をぐしぐしとこすり欠伸をする男が一人。

男の髪は艶やかな漆黒で瞳は黒曜石がごとく輝いている。  
彼の名前は黒崎空雅。

この屋敷の主にして、ごく普通の高校生である。

さて、冬の朝は当然のことながら寒い。

布団から出るのも億劫なくらいに寒く、まだ暖かさが残る布団からでるのは困難を極めるのだ。

この季節に早々と布団と決別するということは、それすなわち死を意味する。数多の死線をくぐり抜けて来た猛者達ですら容易に突破することができない冬最大にして最強の罠こそが、この『布団』と呼ばれるものであった。

これから脱出を試みて散っていったものは数知れず。かの有名なスネーク氏もこいつに敗れたと聞く……。

この罠から抜け出すというのは、困難以上に不可能なように思えた。

そう、いつもならば。

しかし、今日の空雅はいつもとは一味違った。

あの寝坊助大魔王たる空雅が自らの力だけで、起きたのである。もはや今日は雪が降るどころの騒ぎではない、まさに天動驚地。

掛け声とともに起き上がった空雅は、なおも睡眠という名の墮落へと誘い続ける諸悪の権化たる『布団』を睨みつける。

勝負は一瞬、一秒たりともすきは見せられなかった。

空雅の部屋を厳粛な沈黙が包み込む。

秒針を進める時計の音だけがやたら大きく聞こえた。

そして暫しの沈黙の後、長針が天頂を挿した刹那……！

「うおおっ！！」

凄まじい気合いの籠もった掛け声とともに、空雅はソレを思いっきり天高く蹴り上げた。

そして自身もそれにあわせて華麗に跳躍。  
その腕から繰り出される神速の技の数々。

双方が綺麗に着地したときには、既に雌雄しゆうは決していた。

「ふ、他愛もない」

ギザッたらしく髪を掻き揚げ、空雅は決めゼリフを言い残す。

空雅の目の前には一瞬のうちに綺麗にたとまれてしまった一式の布団。

そう、空雅は冷酷無比にして残虐非道な冬の王に勝利したのだっ  
た。

そして「よいしょ」と小さく声を挙げ、空雅が言うところの冬の  
王とやらを持ち上げ、押し入れという名の監獄に幽閉してやる。

「貴様が僕に勝とうなど一万年と二千年は早いわっ！！」

とどめとばかりにビツと押し入れに指を突き立てながらバカなこ  
とを言い残した空雅は「うっはっはっは！」と高笑いをしながら部  
屋を出て行くのであった。

何というか、朝はテンションが高い空雅なのである。

居間に降りると見慣れた金髪碧眼の少女を発見する。

どうやら、先にベルが起きていたようで「ぽけ」とソファに腰掛けていた。

「おはよう、ベルさん」

先ほどのおかしなテンションはどこへやら、いつもの落ち着いた空雅はニコリと微笑みながらベルに挨拶をする。

「……おはようございみゆす、空雅様」

それに対してぺこりとお辞儀とともに返すベル。しかし、眠気からか上手く呂律ろれつが回っていない。

そんなベルを見て、無類の可愛い物好きである空雅の可愛いものレーダーが昨晚に続いて再び反応した。

今、ベルが身にまとっているものは圧倒的な威圧感と物々しさを持つ西洋甲冑ではなく、可愛いネコの顔がプリントされたシャツに短パンだった。

どうやらこのシャツはベルにはブカブカだったらしく、膝までを覆い隠す丈の短いワンピースのようになっていた。端的に言えばサイズが合っていないのだ。

と、いつものこのシャツは空雅のものであった。昨晚、夜も更けて床につこうとした空雅は信じられないものを目にしていた。

ベルが西洋甲冑に身を包んだまま眠ろうとしていたのである。  
慌てて眠りにつこうとするベルを制止させて、その奇行に及んだ  
わけを訊ねると、

「……これは寝るとき専用の鎧」

とのことだった。

しかし鎧を着て寝るというのもかなりどうかと思った空雅はベル  
にシャツを渡すとそれを着るようにと促したのである。

そういつた経緯を経て今こうしてベルは西洋甲冑ではない、比較  
的まともな格好……いや寧ろ可愛らしい寝間着を身にまとっている  
のだった。

（むう、これは凶悪なまでに可愛いな）

などと水玉模様をあしらったパジャマを可愛らしく着こなした空  
雅が考える。

もともとベルは恐ろしく可愛い部類に入る。

腰まで垂らした綺麗な金髪に、透き通ったように澄んだ蒼い瞳。

陶器がごとく白い肌はどこまでも白で、少し小柄なその体軀は思  
わず庇護欲をそそる。

そして何の装飾を加えていないにも関わらず、これだけの破壊力  
をもつのでだ。それに加えて空雅コーディネートの可愛い格好  
をさせたとあらば、それはもうこの世のものとは思えないほどの愛  
らしさを醸し出していた。

「……空雅様、朝ご飯どうしましょう?」

そんな妖精と言っても何ら差し支えのない彼女がちょいちょいと指でつついて上目遣いで聞いてくる。

（朝ご飯ねえ……）

空雅が朝起きると一通のメールが届いていた。

果たして、メールは黒崎家でかれこれ四年間は家政婦を続けている女性からのもので、内容は以下の通りであった。

TO：若様

申し訳ございません、若様。

今朝は二日酔いの為に仕事に行けそうにありません。

夕方には我が命に替えても必ずしも馳せ参じますので、何卒よろしくお願いいたします。

本当に申し訳ございませんでした。

- E N D -

とのことである。

有能にして万能な家政婦さんにしてはこれは珍しいことである。まさかあの人に限って二日酔いになるまで酒を飲むなんて、余程の理由があったのだらうと心配して訊ねたところ、

『昨夜は若様がくださった折角の休日でしたので友人と久しぶりに飲もうと思っていたのです。が、クリスマスは彼氏と過ごす、などと薄情な友人に<sup>いさよ</sup>尽く断られた独り身の悲しい私はヤケになって一人酒をしていたのです』

だそうだ。

何と言うか、このメール一通分の中に二十代中盤女性のリアルな想いがギッシリと詰まっているような気がするが、ここはいつもの苦笑で受け流す。

まあ、とにかくいつもよく働いてくれるので今朝の仕事の方は休みとしておくとして、家政婦さんがいないのでは朝ご飯は自分で作るしかないようであった。

「うん、ちょっと待っててね。今すぐ作って来るから」

「——（こくこく）」

こうして黒崎家の朝は順調に過ぎていく。

一本の電話が入るまでは……。

十

さて、突然ではあるが黒崎空雅には悩みがあった。

いや、悩みと言えば少し語弊があるかもしれない。適切にいうならば、そう心配ことがあった。

クリスマスが明けて翌日。空雅の通う高校では通常通りに授業があった。

高校の方としては既に一週間辺り前から名目上と社会的体裁から一応冬休みということにはなっているが、連日のように『冬季講習』と銘打った授業があるのであった。

昨日は流石に教師陣も「クリスマスぐらいは勘弁してやろう」思ったのか、冬季講習とやらは休みだったが今日から大晦日までは毎日学校があるのだ。

——いや、そこは空雅にとって差したる問題ではない。

肝心な心配ごとというのはベルを一人残して学校に行くことであつた。

あの世間一般の常識から大きく逸脱したベルを家に残して行くのはいささか以上に不安である。

さりとて、ベルを学校に連れて行くわけにもいかず、どうしたものかと眉根を寄せる。

「どうすつかなあ……」

最悪の場合は学校を休んでしまおうか、と考える。

もしも自分の保護者替わりでもある家政婦さんにバレたら、物理的な意味でも半殺しになることは必須だがベルの為である。そのぐらひは構わないと思う。

しかし、どうやらベルはそうは思わなかったらしく、

「……ダメ。空雅様は学校に行くべき」

ふるふると首を振りベルは言った。

勿論、想い人である空雅が自分のことをそこまで心配してくれたことは嬉しくは思う。

だが、何も自分のせいで学校を休む必要はないと思ったのだ。

「……でも、ベルさん。お昼ご飯もちゃんと食べなきゃだよ？」

「——大丈夫、構成する」

心配そうな空雅にぐっと親指を突き出して答えるベル。

実のところを言うとまだ来て二日目の家に取り残されるのは堪らなく不安だったが、空雅に心配かけまいといつも通りに振る舞った。

……が。

黒崎空雅という男は人の心の動きに敏感な目ざとい奴だった。

一瞬にしてベルの強がりとも言えぬ強がり気づく。

「やっぱり、今日は休むよ」

一切、色恋沙汰では発揮されることのないであろう敏感さで、ベルの不安を見破った空雅は柔和な笑みを浮かべた。

「ベルさんを残しては……」

「——ダメ、学校に行くべき」

しかし、空雅の言葉を途中で遮るとピシャリとベルは言い放った。

自分のせいで、空雅に学校を休ますわけにはいかない。好きな人なら尚更である。

「でも……」

「——ダメ」

「心配だから……」

「——ダメ」

暫く同じ押し問答を繰り返した。

しかし、空雅にもベルにも一歩も引き下がるつもりはない。兩人とも相手のことを思えばこそその争いであつたのだから。

ブルルルル

そんな時、居間に電子音が響いた。電話だ。

（こんなに朝早くから誰だろう？）

と思いながらも、一旦ベルとの会話を打ち切り電話に出る。

『やあ、空雅くん！ 元気してるかな！？』

果たして受話器越しに聞こえてきた声はバンのものであった。

「えと、朝早くから一体何の用でしょうか？」

『はっはっは、今日はちょっと空雅くんとベルちゃんにお知らせが

あつてね!』

受話器越しからでも感じる事ができる明るい元気澁刺とした声に思わず苦笑する。

「と、言いますと?」

空雅はくいくいとベルを手招きする。

それにつられてトテトテと走って来たベルは、仲良く空雅と一緒に受話器に耳を当てバンの言うお知らせとやらを聞こうとする。

『  
』

「!?!?」

そしてバンの言葉を聞いた空雅とベルは驚きに目を見開く。

その内容とは奇しくも、先ほどまでの空雅とベルのお互いのことを想い合ったがゆえの争いを解決させるものだった。

ベルを一人残して不安にさせることもなく、空雅を休まさせることもない。

それはまさに二つの問題を一拳に解決するものだった。

そして、また新たな騒動を引き起こしそうな波乱の予感が漂う内容だったという。

『今日からベルちゃんは空雅くんの通う高校に転入して貰うことにしたから』』

こうして、黒崎空雅の受難な高校生活が幕を開けるのであった…。

## 日常回帰 / 02

神楽市は、南北に連なる成瀬川によって東西に区分され、その東手には住宅街、西手には工業地域、と単純かつ無骨な区分けとなっている。

そして、市を大きく縦断する成瀬川とは別の、もう一つ大きなシンボルがこの神楽市には存在する。

かぐらやま  
神楽山。

地域名をそのまま取ってきただけという、実に何の捻りもない真名を持つその山は、神楽市の中央部にゆったりと腰を降ろしていた。

これと言って高度が高いわけでも低いわけでもない、特に紅葉が綺麗というわけでもないという神楽山なのだが、いかなるわけか地元民には深く愛されていた。

おそらく、その理由の一端としては、そこで『青春』というときに青臭く、あるいは汗臭い、しかし未来永劫ともに輝き続ける友との大切な年月を過ごした住民が多いからであろう。

そう、つまりは神楽山の中腹部には青春の代名詞とも言える高校が一つ建っている。

そしてそのOBたる地元民が、かつて自分たちの青春の日々を費やした土地を愛するのは、もはや当然のことであった。

「うっ、痛ててっ」

さて、そんな地元民たちが愛して止まない山間部の校舎の中。  
一人の少年がキリリと痛む胃を抑えながら、苦渋の表情で廊下を歩いていた。

この少年の名を黒崎空雅という。

艶やかな漆黒の黒髪と黒曜石がごとく輝く瞳を持つ少年である。

「うがぁ」

朝。学校の始業時間より少し前の時間。

職員室から自らが所属する教室へと繋がる渡り廊下を歩く少年の口から軽い溜め息が漏れる。

その息は白く、実に頼りない。

そして何より空雅の表情は芳しいものではなかった。

当然いつものような慈愛に満ちた優しそうな、柔和な笑顔ではない。

その顔は哀感溢れるものでも寂寥感を感じさせるものでもなかったが、どこか諦観とも達観とも取れる仙人のような印象を与える……  
…そんな疲れたような悟りきった表情だった。

空雅は痛む胃を抑えひた歩く。一路教室へ向けて、ゆっくりと確実に。

（この胃の痛みは心労から来るもの何だろうなあ。後でベルさんから胃薬でも貰ったところ）

と、そんなことを考えながら歩く空雅ではあるが、言わずもがな心労の原因というのは大半がベル絡みである。

ベル自身は凄く可愛くて優しい良い子だ。勿論そういった意味では空雅も彼女のことは好きだ。

しかし、如何せん彼女はあまりにも特殊すぎたのだ。

普通の人のそれとは何もかもが違う。その違いを逐一咎める気はさらさらないが、ある程度は普通の基準と合わせなければ社会において円滑な生活など有り得ないのだ。

ともなると彼女には必要最小限とは言え、ある程度の常識は教えないければならない。そして彼女に人の世の常識というものを教えるという大義を果たすのは、当然の帰結として許婚にして同居人である空雅の役目だった。

（でも、やっぱ、普通の人と感覚がずれてるんだろぅな……）

お世辞にもまともな感覚を持つていたとは言い難い同居人のことを思い、空雅は微苦笑をする。

サンタと普通に暮らしている自分もどこか感覚がずれているとは微塵も思わぬ空雅である。

そんなことはさて置くとして、今ベルは空雅の隣にいない。勿論、前にも後ろにもその姿を確認することはできなかった。

というのも、転校生であるベルは原則として先に職員室に寄らなければならぬ。そして始業の鐘が鳴り響いたらば、教師に連れられて自分がこれから所属することとなる教室に案内されるのがこの高校での通例である。

そういった経緯で、無事にベルを職員室に送り届けた空雅はそそくさとその場を後にし、自らの教室に向かうのであった。

1年4組。

なんの装飾品もついていない簡素なプレートには黒字でそう書かれていた。空雅の所属する教室である。

ガラリとドアを開け、さっそく中に入った空雅は授業が始まる前の学生の早朝特有の騒がしさに思わず顔をしかめる。

そして一際騒がしい一団が自分の席の周りで群がっているのを見つけて、更に空雅は顔を陰しくさせた。

「なにやってんのさ、鍊」

「おつ空雅、今日は早いじゃんか。あの遅刻大魔王のお前が早くから登校してくるとは、あな珍しや」

そう軽い調子で返す男は空雅の親しい友人の一人でもある松江鍊まつえれんであった。

茶髪に染め上げた頭に軽薄そうな……もといノリの良さそうな雰囲気醸し出す彼は完全な三枚目で役割で言うところのボケ。憎めないお調子者とはまさに彼のことであった。

「でも、ホンマ珍しいこともあったもんやなあ。あの空雅がこんな早ようから登校するやなんて……」

このどことなく関西のイントネーションで話す少女の名前は橘佳乃かの。

やや気が強そうな猫のようなつり目に、黒髪を頭部で結い上げたポニーテールが特徴の女の子である。充分に美人の類に入るものであった。

「鍊も橘さんも僕のことを何だと思ってんの」

ジト目の空雅は鍊と佳乃を一瞥すると、そつと溜め息をつく。

「何ってアレだ。毎朝ラブラブのメイドさんに優しく起こして貰ってる豪邸の主だろ？」

「豪邸の主というところに異論はないけれど、あとは突っ込みどころ満載だよ？」

ニヤニヤと笑う鍊に絶対零度の視線で返す空雅。  
可愛くないものには超絶厳しい奴である。

ともかく鍊が言った『ラブラブ』のところはさて置くとして、おそらく、いや十中八九確実に鍊が言っている『メイドさん』というのは黒崎家家政婦のことであつた。

いや、まあ確かに彼女は黒地のワンピースの上にフリルの付いた純白のエプロン、頭の上にはカチューシャにしてはやや華美なヘツドドレスを身につけてはいるが、あくまでも彼女は家政婦なのだ。それ以上でも以下でもない。

「せやなあ……、あと許嫁とかおつたら完璧やのになあ」

「!？」

何気ない佳乃の呟きに、思わず顔が引きつる。

つい昨日の朝、許嫁ができたのだ。空雅は乾いた笑いを浮かべることしかできなかった。

「何が完璧なんだ？」

と、鍊が首を傾げながら訊ねる。

「や、だってな。関西娘な女の子に、委員長キャラの紬つむぎやろ、それに王道のメイドさん。あと自分に足りへんのは許嫁だけやん、許嫁おったら完璧やで？」

（あっはっは、充分足りてますけどねえ）

とは、死んでも言わない。何というか上手くは言えないが、言ってしまったら人として終わる気がする。

「それに橘さんは僕を何だと思ってるんですか。僕は一体どこのギャルゲーの主人公なんです？」

「え、ちやうかつたん？」

驚いたような心底意外そうな顔の佳乃に、同じく間違えて碁石を飲みこんだような顔の鍊。

この兩人の反応で空雅の第三者からどういった認識を持たれているか一目瞭然であった。

「いや、空雅と言えば吐き気を催すほどの優しさでいつの間にかフラグを立てている、とかそんな感じだろ」

「むう……」

鍊の言葉に空雅は若干顔をしかめてみせる。

が、確かに鍊の言うことは正しかった。

この空雅という少年は一部の女の子達からは物凄く人気がある。

この空雅という少年は知ってる通り『可愛いもの』に目がない。詰

まるところが意識的にせよ、無意識にせよ、可愛い女の子にはべらぼうに優しいのだ。

そして当然、その逆も然りで、そうではない子にはわりと厳しい。

つまりは女の子達にとって黒崎空雅という少年は一種の登龍門とも言えるものであった。

空雅に優しくしてもらえることこそが、『可愛い』という何よりもこの証。

空雅に認めてもらう為に、可愛いという証を得るために。日々美容を追求する乙女達も少なくないという。

そして、その結果として女子達は空雅に認めてもらうために必死に磨きをかけるので、空雅が所属するクラスは毎年のことながら可愛い子やら綺麗な子が揃うという逸話が残されているのだった。

まさに生きた伝説。

男子生徒側としても女子が綺麗になるのは歓迎すべきことなので、空雅様々と言ったところだろう。

「ちゅうわけで、自分は確実にギャルゲーの主人公やん」

うんうん、と腕を組んで頷く関西娘。

この娘こそが初めて『登龍門』を見事に看破した少女でもある。もつとも無自覚のうちに看破していたのだが……。

「だから、僕はギャルゲーの主人公じゃないってーの。フラグを立てた覚えもないしさ」

空雅は反論を試みる。

フラグを立てるとか立てないとか言われても、全く身に覚えはな

いのである。もはやこの抵抗は必然であつた。

「でた！ ギャルゲー主人公スキル『恐ろしいまでに鈍感』！」

「せやなあ、実際にウチはフラグ立てられとるわけやし……」

が、そんな弱々しい反論などどこ吹く風よ、とばかりに一蹴。

鍊は失礼極まりない上に、佳乃に至つては何やら気になる発言を残している。これ以上何を言つたところで無駄であろうということ  
は容易に理解できた。

「皆さん、朝から騒がしいですよ？」

と、そんな言い争う三人組を窺める軽ろやかなソプラノが背後で響く。

空雅達が振り向くとそこには一人の女子生徒が眼鏡の弦を抑えて立っていた。

黒縁の眼鏡に三つ編みがトレードマークの少女、進藤<sup>しみず</sup>紬である。

知的な印象を与えるその少女についたあだ名は委員長。品行方正にして成績優秀、そしてこの少女も佳乃と同じく『登龍門』をくぐり抜けた数少ない乙女の一人である。

勿論、自覚はないのだが。

「元気なのは大変良いことです。しかし、ここは公共の施設、学校であるということもお忘れなく。少しは自重すべきですね」

紬はキラリと眼鏡を反射させながら淡々と喋る。

はてさて、何故この少女が委員長のようなことを言っているかという  
と、それは委員長だからである。決して委員長はあだ名だけで

はないのだ。

「おや？ 黒崎くん、今日は早いんですね」

小首を傾げながら詮索するような目つきで空雅を見る紬。しかし、今日に限って空雅が早く来た理由が解らない。

「そういう紬こそ、今日は随分遅かったやん。どないしたん？」

佳乃の言う通り今日の紬はいつもの登校時間に比べてかなり遅いものであった。

いつもであれば、「一番に来て、教室のカギを開けるのも委員長の仕事です」と、クラスで最も早く登校していたのに今朝はどういったワケか遅かったのだ、佳乃が疑問に思うのも無理はないというものだった。

「いえ、学校自体にはいつも通りの時間に登校していたのですが……。少し職員室で呼び止められてまして」

「呼び止められる？ 進藤がか？」

思案顔で首が取れそうなほどに首を傾げる錬。

本当に首が取れたら面白いと思う。

「面白くねえよ！ 相も変わらず男には容赦ねえな、空雅！」

即座にツツコミ、そして文句を一つ。

これを反射的にこなしてしまう辺り、錬の芸人レベルが伺える。

「まあ錬はさて置くとして、進藤さんはどうして先生に？」

「……マジでひどいな、空雅」

もはや無視。完全に鍊をアウトof眼中にした空雅　は優しい笑みで紬に訊ねる。

「いや、どうも転校生がこのクラスに来ることになったみたいでして……」

(……このクラス?)

ピキリ、と空雅の頬が引きつる。

「それで、その子は女なのかつ!？」

「鍊、がつつきすぎやで。自分どれだけ飢えてんねん、見苦しいで？」

「いえ、性別は解りませんでした。顔もよく見えなかったもので……」

固まる空雅をよそに、鍊、佳乃、紬は会話を続ける。  
空雅のおかしな様子に気づくものはまだいない。

——その時、始業のチャイムがなった。

席を立っていた生徒は自席に戻っていく。  
ガラリ、と扉が開いた。

人が二人、中に入ってくる。

一人は空雅達の担任。

そして、もう一人は天使のような容姿であるベル……ではなく。

そこにいたのは一体の“西洋甲冑”であった。

黒崎空雅の受難の日々はまだ始まったばかりのようだった。

## 日常回帰／02（後書き）

うにゃ。

つ、ついにストックがきましたゝ><

これからは更新ペースが落ちるかも……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9277i/>

---

お嫁サンタ

2011年1月14日17時46分発行